

---

# 使い魔はGALAXY

スライム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

使い魔はGALAXY

### 【Nコード】

N3904Y

### 【作者名】

スライム

### 【あらすじ】

ヴィントレーゼ魔術学院で落ちこぼれの少女、リーズ・アंकテイルは使い魔の召喚に立場の逆転を賭ける。だが、召喚して出てきたのはどう使役すればよいのかまるで分からない四角くて薄い箱型の何か。それは異世界でスナガワトルという名の男が持つケイタイデンワという代物だった！ 圧倒的な高精彩を誇るディスプレイと、処理能力の高いデュアルコアCPUを搭載したスマートフォン、GALAXYが今、異世界で火を吹く！？

## プロローグ

春の柔らかい陽射しに包まれる中、リーズは帆船からその島に降り立った。

潮の匂いを含んだ風に、黒い広つば帽子が飛ばされないうつ手で押さえる。服の上から身に着けている広幅の黒マントが、風に煽られてバタバタと音を鳴らした。

今日の天気は雲一つ無い快晴。

空に太陽の光を遮るものは一切無く、リーズの立つ位置から遠目に見える塔や城のような建物を照らしている。

遠くから眺めている状態でも、それらの全容を視界に収めるには、見上げる必要がある程の大きな建築物。リーズがそれらを、珍しうに眺めていると、リーズに続いて船から降りてきた少女が、その隣に立つて弾んだ声を上げた。

「やっと着きましたよ　ここがヴィントレーゼ魔術学院ですか。これからの六年間、この場所で私達は過ごすのですね」

褐色の肌をした白髪の少女が、親しげにリーズに話しかける。

この少女とリーズは、魔術学院の新入生を大陸からこの島へと運ぶ船の中で、偶然に同室になったのが初対面だ。

まだ出会ってからさほど日数も経っていないのに、このエルヴィという名の少女はやたらとリーズに懐いていた。

リーズにとっても、彼女の陽気な性格は眩しくもあり、好ましくもある。

口数の少ないこんな自分の何処が気に入ったのか不思議だったが、エルヴィはリーズにとって初めての友達だった。

とある理由によつて、リーズはこれからの学院生活に様々な不安を抱えていたのだが、これは幸先がいいんじゃないかと思う。

リーズが感慨深げに学院の外観を眺めていると、エルヴィは堪えきれないといった様子でリーズの手を掴み、学院の中でも一際大きな建物を指差した。

「さつき船員の人に聞いたのですが、丁度もうすぐあそこでAランクの試合が行われるそうですよ！ リーズも一緒に見に行きましょう。」

エルヴィはリーズの返事を聞く前に、その手を引いて駆け始める。それに為すがまま引つ張られ、リーズも足を動かした。

リーズもその試合は見ておきたかったので、抗議の声は上げない。むしろ、リーズの目的の為には見て置かなくてはならなかった。

（私はこの学院で成すべきことがある）

初めて友達が出来たことで浮かれそうになる心を、リーズは自分が此処に来た理由を思い出して引き締める。

リーズはエルヴィに手を引かれながら、Aランクの試合が行われるという巨大な建物を見据えた。

ヴィントレーゼ魔術学院。

それは世界中の魔術師の見習い達の中から、学院が規定した一定の水準以上の魔力を持っている者のみが集う学舎。

その卒業生は各国でも優遇され、将来が約束されていると言っても過言ではない。

特に学院で定められているランクの最高位であるAランクに達した者は、いずれも多大な影響力を持つ地位に就き、各々の国で歴史に名を残す偉人となる者が多かった。

その理由は、この学院でのみ学ぶことができる召喚術にある。

学院が規定する魔力量を満たした者だけが扱えるその魔術は、狭間の世界と呼ばれる異界から一体だけ召喚獣をこの世界に呼び寄せ、使役できるというものだ。

召喚獣の力を得た魔術師は、他の魔術師とは一線を画す力をその身に宿す。

その特別な魔術師達の中でも、さらに一握りの実力者と言われるAランクの者同士の戦いが、今リーズの眼下で行われようとしていた。

この島の中央に位置する場所にある、巨大な半球型の屋根をした建築物。

学院の関係者からは闘技場と呼称されるその建物の観客席で、リーズとエルヴィは眼下に位置する試合場を見下ろす。

地を揺るがすほどの歓声に包まれながら、その試合場では二人一組の選手が四人、左右に分かれて向かい合っていた。

その四人の丁度上空には、観客達にその戦いの詳細が分かるよう、大規模な幻影魔術によって試合場を映し出している。

その映像を見て、エルヴィは感嘆の声を上げた。

「ふわぁ、凄いですね あんな魔術、初めて見ましたよ！」

「私も」

「それに、凄い観客の数です！ 人の声って一杯集まると地面が揺れるんですね」

「うん」

「いきなりAランクの勝負が見られるなんて、私達は運が良かったですね」

「よかった」

リーズの素っ気なさそうに聞こえる返事に構わず、エルヴィがはしゃぐ。

エルヴィには、まだリーズが抱えるもののお話を話していないのに、気を悪くした様子もなくリーズに話しかけ続けた。

そのことを不思議に思いつつも、リーズなりに懸命に声を出してエルヴィに応じる。

そうしている内に、試合の開始を告げる音が闘技場に響き渡った。と同時に、試合場にいる各々の召喚獣が眩い光を放ち、それぞれの召喚主へと吸い込まれていく。

その光は召喚主へと移り、その全容を光で覆い隠した。

召喚獣と、その主の融合。

それによって召喚主は、使役する召喚獣の特性によって様々な力を得る。

やがて選手の体から光が収まると、真っ先に二人の人間が前に飛び出し、衝突した。

片方は、体の所々に赤い鱗が見え隠れする、頭にドラゴンのような骨の角を生やした女。

片方は、甲殻類のような漆黒の皮で体の節々を覆い、悪魔のように目を金色に輝かせた男。

召喚獣との融合によって、二人の体はそれぞれの召喚獣の影響を受けた姿に変体していた。

両者共に、常人を遥かに凌駕した身体能力によって、激しい肉弾戦を繰り広げる。それも、ただ殴り合うのではなく、二人とも体を動かしながら謳うように呪文を唱えていた。

美しい旋律のような声を伴って、洗練された体術を繰り広げるその様は、まるで華麗な舞歌を見ているかのような錯覚を起こす。

女が先に呪文を唱え終わると、周囲の地面から何本もの巨大な炎の柱が立ち上り、それぞれが蛇のようにうねりながら、傍にいる女ごと男を襲った。

それに続いて男が呪文を唱え終わり、男の周囲に出現した幾つもの黒い球体が、その炎の蛇を残らず引き寄せて吸い込んでしまう。

女がその黒い球体に囲まれて逃げ場を失ったところで、女の後ろ方に控えていた選手が呪文を唱え終わった。

先程の炎の柱を束ねたものよりも、さらに数倍以上も大きな炎の渦が巻き起こり、男と女がいる場所を丸ごと焼き払う。

その炎は黒い球体を全て薙ぎ払い、男の体を焼くことに成功した。味方の炎に巻き込まれた女は、自身の召喚獣の特性なのか、炎の只中であってまるでダメージを受けていない。

男が全身に火傷を負わせながら後方に下がり、炎の中から脱出してくると、傍に駆け寄った男の味方選手が、丁度呪文を唱え終わった。

男の体が光で構成された膜に覆われ、その身にあった火傷をみるみるうちに治癒してしまう。

結局、どちらの二人組にもダメージは残らず、戦いは仕切り直しになった。

その一連の戦いを見届けて、リーズが息を呑む。

隣にいたエルヴィが驚愕の表情をしながら、感動とも畏怖ともつかない声を上げた。

「凄いですね……それに、とても綺麗です」

「うん」

「あそこが、リーズの目指す場所なのですね？」

「……うん」

エルヴィの言葉に、リーズは少し尻込みしながらも頷いた。

リーズが成すべき目的は、Aランクのさらに向こう側にある。

(だから私は、絶対にあの境地に辿り着かなければならない)

リーズは眼下の試合場で続けられる戦いに圧倒されながらも、自身心に改めて決意と覚悟を刻んだ。

リーズが自身の召喚獣と対面するのは、それから数ヶ月後のこと



である。

## 第一話

それは窓の存在しない薄暗い部屋にて執り行われた。

その部屋の中央に立つ小柄な少女の唇から、力のある言葉が紡がれる。辿々しく紡がれる呪文が、時折擦れたように乱れるのに合わせて、床に置いてある無数のロウソクの火がゆらゆらと揺れた。

ヴィントレーゼ魔術学院の魔術師にとって、今後の命運を握るといっても過言ではない使い魔の召喚儀式。

産まれながらに声が出にくいという不利な条件によって、学院史上、最悪の落ちこぼれという烙印を押されることを余儀なくされていたリーズ・アंकテイルは、その使い魔の召喚に全てを賭けていた。

魔法の呪文は、詠唱を途切れさせると失敗してしまう。リーズはこの召喚魔法で、既に両手の指では足りないほどの数の失敗を繰り返していた。

だが、魔術師一人に一匹までという制限のある使い魔の召喚は、何度失敗してもリスクはない。一度成功してしまえば、使い魔が消えることはないのだ。

だから、魔法詠唱を高確率で失敗してしまうリーズは、その欠点を強力な使い魔の力で補おうと考えたのである。

不幸中の幸いか、リーズは魔力だけは学院史上でも屈指の大きさを持っていた。

だからその魔力が許す限り、ありったけの力を込めて召喚呪文を唱える。

見えない力の奔流が、リーズの長い栗色の髪を揺らめかせた。

そしてとうとう、リーズは召喚魔法を詠唱しきるのに成功する。床に出現した蠢く幾何学模様の魔方陣を確認して、リーズは安堵の息を吐いた。

そして、床の魔方陣が眩い光を放出しはじめると、リーズは固唾を呑んでそれを見届ける。期待に膨らむ胸を持って余して、体をウズウズとさせた。

そこに、込められるだけの魔力は込めた。リーズの考えが正しければ、数多くの使い魔の中でも、類を見ないほどの強力なものが召喚されるはずである。

現れる使い魔は一体何であろうか？

この世界で最強の使い魔と謳われるドラゴンか？

それとも、上位の精霊の類かもしれない。

もしかすれば、伝説上の神や悪魔ということも

そんなことを考えている内に、魔方陣の光が一つの形に収束していき、召喚される者の姿を象っていく。

その予想外の小ささに、リーズは小首を傾げた。

召喚獣とは、大きいもので人の半分ぐらい。小さなものでも膝くらゐまでの大きさはある。

だが、今リーズの目の前で収束していく光は、明らかに手の平ぐらいの大きさを象っていた。

そのことに、リーズは何か嫌な予感を覚える。

自分の中で沸き上がりそうになった強い不安を、リーズは首を横に振って払った。

(使い魔の能力と、大きさは関係ない)

リーズは自分にそう言い聞かせて、その光が収まるのを待つ。やがて完全に光が消え、リーズのいる部屋が元の薄暗さを取り戻すと、それは姿を現した。

その分厚い札のような形をしたそれに、リーズは目を丸くする。それは静かに床の上で鎮座しており、いつまで待っても動き出す気配はなかった。

反応を待っていても埒が明かないので、リーズは恐る恐るその物体を手に見てみる。

それは、リーズの知らない何かで構成されていた。近くでそれを観察すると、凄まじく精緻で洗練された形状に驚く。

だが、リーズにはそれがどういう存在なのかが全く理解できなかった。

そもそも、それは今だにピクリとも動き出す気配を見せないのだ。一瞬、何かの間違いではないかとも思うが、召喚魔法を終えた後に感じる繋がりには、しっかりと目の前の物体から感じる。

召喚魔法で召喚した使い魔とその術者は、目に見えない繋がりを持ち、その繋がりをもって術者と使い魔で魔力を共有する。

そしてまた、その繋がりによって言葉や知能に隔たりのある使い魔と意志疎通が可能だった。

リーズは、その手に持つ自分の使い魔と交信を試みる。

『こんにちは。私の意志、伝わってる？ 言葉が分かる？』

その交信は、手に持つ物体を通じて異世界にまで飛んだことを、  
この時のリーズは理解していなかった。

> i 3 4 5 9 1  
— 4 1 6 4  
<

## 第二話

俺、砂川透には友達が少ない。

いや、本当は少ないどころか一人もいない。だがこう言っておけば某ライトノベルのように女の子との出会いが沢山あるかもと思った。全然そんなことはなかったが。

顔は人が寄りつきにくい強面であるのに、虎の名前を冠した少女が家に突撃してくることもない。

さらには、生まれつき特定の言葉や状況で声が発しにくくなる症状のせいで、俺はとことん無口だ。そのせいで高校の同級生には怖い人だと誤解されているが、偶然が重なって番長に祭り上げられ、不良が集まってくるなんてこともない。そもそも、今時の私立高校に番長なる地位が存在するはずがない。

正真正銘、俺は友達が一人もいなかった。

これでも高校に入学したばかりの数ヶ月前は、友達を作ろうとあらゆる手を尽くし奔走したのである。

もちろん、部活にも入ってみた。

ずっと友達がいなかったせいかゲームや漫画などの一人遊びに詳しかった俺は、同好の士が集まっていそうな漫画研究部に入部したのだ。

そしたら、次の日に漫画研究部は廃部してしまった。どうやら漫画研究部の方々は、俺が彼らを財布代わりするつもりだと勘違いしたようだ。

元々少なかった部員達が一斉に退部届を出したせいで、残った部員が俺一人になってしまい、さらには顧問まで逃げたので漫画研究部は廃部。

早々に悪い噂が立った俺を受け入れてくれる部はなく、さらには

クラスの人間にも完全に悪人のレッテルを貼られる結果となつてしまった。

今ではもう、俺の座っている机の周囲は妙に距離が空いてる状態である。

授業中の教師ですら俺と目線を合わせようとしない。

俺はこの状況に、もう半ば諦めていた。

開き直ってふてぶてしく椅子に座り、今行われている授業に耳を傾ける。

だがこの時、黒板に書いてある問題の解答に、教師が珍しく俺を指名する気配を見せたのだ。

と同時に、頭の中に声が響く。

「じゃあ、この問題を砂が」

『こんにちはわ。私の意志、伝わってる？ 言葉が分かる？』

「ああ？」

「……佐藤くん、分かるかね？」

「あつ……」

頭の中に響いた言葉に反応して上げてしまった声が、丁度教師を威圧するかのようなニュアンスになってしまった。

それに怯んだ教師が指名する人を変えてしまう。それにより、ますますクラスメイト達に誤解が広がっていく気配を感じた。

俺はそれに軽い舌打ちをする。そして、さっきの声は何だったのかが気になり、左右を見渡した。

周囲に座っている奴らは、俺と目を合わせようとしめない。この中に、俺に話しかけてくる奴がいるとも思えないのだが……

『せっかく誤解を解くチャンスになったかもしれないのに……何だ  
今のは？幻聴か？』

『……幻聴じゃない』

頭の中の声が、俺の思考に返事をする。

……もしかして俺も、某ラノベにあったエア友達というものを習  
得してしまったのだろうか？ あまりに寂しすぎて頭がイカれたか？

俺が眉間にシワを寄せて頭を抱えても、頭の中の声は容赦なく続  
いた。

『こんにちは。私の名前はリーズ・アंकテイル。あなたを召喚し  
たのは私』

召喚？ 何を言ってるんだこの幻聴は？

『私にあなたのことを教えて。名前があるなら名前を。あなたがど  
ういった存在で、どういう力が使えるのかを私に教えて欲しい』

なんだか妙な質問をしてくる幻聴だ。

その時、俺はふと思った。

こう考えるのは末期症状なのかもしれないが、もしかしたらエア  
友達というのも悪いものではないかもしれない。

例えばそれが二重人格だろうが、違う考え方を持つ人格と会話でき  
るならば、それは立派な友達ではないか！

そう考えた俺は、とりあえず頭の中の幻聴と話を適当に合わせて  
みることにした。



『俺の名前は砂川透だ。私立の洛城高校に通う学生。使える力は……えーっと……少し絵が得意だ』  
『……………』

俺の自己紹介に沈黙する幻聴。

もしかして、何か失敗したか？ というか、俺は自分の幻聴相手とさえ親しくなれないのか？

俺は焦って自分の幻聴に呼びかけた。

『おい、沈黙しないでくれ。俺は何か間違えたか？』

『ごめん、言っていることがよく分からなかった。……さっきから思っていたのだけど、あなたは動けないの？ なぜピクリとも動かない？』

『あ？ 何言ってるんだ？ 俺は動いてるぞ？』

試しに俺はその場で手を振ってみる。そのせいで、周囲の奴らがチラチラと訝しげな視線を向けてきた。

まあ、今の俺はどう見ても挙動不審だろう。……よく考えると俺、本格的に頭がやばいのかも知れない。

『私には動いているように見えない』

『ああ？ とういうかお前、幻聴のくせに俺の姿が見えてんのか？』  
『だから、私は幻聴じゃない。それに、あなたの姿はちゃんと見えている』

『どういうことだ？ お前には、俺がどう見えている？』

『……………私とあなたは感覚を共有できる。今、あなたに私の視界を送る』

『あ？ 何を言って』

とそこで、俺の視界が唐突に変化した。

いつもの見慣れた授業風景から、見慣れない薄暗い部屋の中へ。俺はそれに驚いて、思わず立ち上がってしまった。

すると、幻聴が途切れて俺の視界が元に戻る。

気が付けば俺は、教室のクラスメイト達の視線を一身に集めていた。

「砂川くん、一体どうしたのかね？」

流石に無視できなくなった教師が、俺に声をかけてくる。髪の毛の薄い、見るからに気弱そうな中年の男性教師だ。名前は覚えてない。

俺は、その教師が立つ教壇のほうへと歩み寄った。

教師があからさまに怯むが、俺の声の大きさと、まことに言葉を伝えるには近寄るしかない。

「…………ちよつと気分が悪いんで…………保健室行ってきます」

「あつ、ああ」

俺はその教師が頷いたのを確認すると、そのまま教室を後にした。

教室を出た後、すぐにまた例の幻聴が聞こえてきたので、俺は保健室には行かずに学校の屋上へと来ていた。

ここならば、人に見られることもないだろう。

俺は屋上の端に座り込み、目を閉じてリースとやらの視界を覗いていた。

そのリースは今、鏡の前に立って俺に姿を見せながら話している。鳶色の瞳に、栗色の髪を腰のあたりまで伸ばした小さな少女だ。外見上はかなり幼く見えるのだが、これでも俺と同じ年ぐらいらしい……。

小学生みたいな小柄な体型に、目がクリクリとして大きい童顔をしているせいで、どうも実年齢よりも幼く見られるそうだ。

そんなリースと話をしている内に、俺はだいたいのことを把握した。

どうやらリースは、俺の携帯電話をリースのいる異世界に召喚してしまったらしい。

何かどこかで読んだライトノベルのような話である。普通ならば信じないで自分の頭を疑うところだが、俺の制服のポケットからは確かに携帯電話が消失していた。

俺の使っているGALAXYというスマートフォンは最新のモデ

ルではないにしても、高校生にとっては非常に高価なものである。最新モデルから一つ前のものを、貯めていたお小遣いやお年玉を使つてやつと買ったのだ。

できれば、返せと怒りの声を上げたいところなのだが、相手の外見が幼いせいか非常に怒りにくい。しかも、それが可愛らしい女の子なのだから尚更だ。ただでさえ人付き合いの経験が少ない俺にはハードルが高すぎる。

そんな俺の内心は知らずに、リーズは手に持っている携帯電話に視界を移した。

『このギャラクシーという道具は一体何ができる？』  
『何ができるって言われても……』

リーズの視界を通して、俺は自分の携帯電話を見る。リーズに側面のボタンを押すように指示して、その携帯電話の状態を確認した。驚くべきことに、電波が繋がっている上に電池の残量が回復している。

これは一体どういう原理なのかリーズに聞いてみると、しばらく時間を置いてから、もっともらしい推論が返ってきた。

『そのデンパというものや、デンチというものが何なのかは分からない。でも、このギャラクシーを通じてそっちのトオルと繋がっていることと、私からの繋がりを通じてギャラクシーと魔力を共有していることで何か影響があったのかもしれない』

『……すまん、何を言ってるのかよく分からない』  
『……要するに、私も何が原因がよく分からないということ』

まあ、お互いがお互いの世界のことをよく知らないのだから、それはしょうがないかもしれない。

とりあえず今は、あるがままの事象を受け入れることにする。  
そして改めて、携帯で出来ることをリーズに説明してみること  
にした。

電波さえ繋がっているならば、できることはいくらでもあるはず  
……なのだが、それには大きな壁があった。

『……文字が読めない』

『そりゃそうか……って、そういうえば何で俺達は言葉が通じてるん  
だ？』

『召喚者と使い魔は言葉が通じなくても意思疎通ができる。だから、  
私の言葉をトオルが理解できるようトオルの知っている言葉に翻訳  
されているのだと思う』

『なるほどな……』

文字が読めないとすると、使用法も限定される。

さらには、次にリーズが言い出した条件に当て嵌まる機能は何も  
なかった。

『できれば、まずは戦闘に使えるようなものを教えて欲しい』

『戦闘に？』

『そう。それが一番重要』

『……すまん、そういう機能はない』

『……え？』

これは声による会話ではなく、繋がりを通じて直接頭に言葉を送  
る心話のようなものらしい。だから、リーズが俺の言葉を聞き取れ  
ないという事態は起こりえない。

それでも、思わず聞き返さずにいられなかったということは、そ  
の事実はずいぶんよほど受け入れ辛いのもかもしれない。

だが俺は、その事実をリーズに伝えるしかなかった。ここで誤魔

化したとしても、すぐに発覚してしまうことなのだ。

『携帯電話は戦いに使う武器じゃない。こっちの世界の生活用品の類の物だ。……正直、そういう物騒なことに使えそうな機能は何も思い浮かばない』

『そんな……』

リーズの打ち拉がれた声が頭に響くと、唐突に視界がぼやける。それはリーズの目から流れる涙のせいだと気が付くと、俺は凄まじく焦った。

何しろ女の子に泣かれるというのは初めてである。

今回のことに自分に責任はないはずなのだが、何だかとても強い罪悪感に心が圧迫された。

何て慰めればいいだろうか？

そう頭を悩ませてみるが、どんな言葉をかければいいのか皆目見当も付かない。俺の人付き合いの経験値は限りなく低いのだ。

『……泣いてるのか？』

結局出てきたのは、そんな言葉。

その言葉に反応して、リーズの視界が横に揺れた。どうやら首を横に振ったらしい。

分かりづらいが否定の意を示したのだろう。だが、質問しておいて何だがリーズが泣いているのはバレバレである。

俺は途方に暮れて、沈黙した。

よく考えれば慰めの言葉をかけようにも、透はリーズのことを何も知らないのだ。

俺はリーズの滲んだ視界を眺めながら、彼女が泣きやむのを待った。

### 第三話

たしかに私の抱えるハンデを無視して、強力な召喚獣だけで状況の好転を考えると考えるのは浅はかだったかもしれない。

それでも、この結果はあんまりだと思った。

一縷の望みを賭けていた召喚獣は、強力な力どころか戦う力さえないと言うのだ。

ただでさえ私は落ちこぼれだというのに、さらには召喚獣の力も弱いとなると、もうどうしようもない。

私は何としてもAランクに辿り着かなければならないというのに……。

自分の不甲斐なさが悔しくて、私は目から溢れ出すものを止められなかった。

運命は、何故こうも私を追い詰めるのが好きなのだろうか？

物心が付いた頃から、何度も何度も自分に降りかかる不条理に泣いて、何度も何度もその運命に呪いの言葉を吐いてきた。

それでも、私はこれまで必死に藻掻いてきたのだ。

どうしようもない自分を何とかしようと、あらゆる努力を惜しまなかった。

だが私につきまとう不条理は、その努力を嘲笑うかのように叩き潰す。

これまでは辛うじて挫けずにやってこれたが、今回のことで私はもう心が折れかけていた。

このどうしようもない私を、どうすれば目的にへと至らせることができるだろうか？ その糸口さえ何も思い浮かばない。

ひとしきり泣いた後、私は胸に酷い空虚感を抱えながら、呆然と



視線を彷徨させた。

私が視線を動かしたのを感じ取ったのか、トオルの声が私に伝わってくる。

『えっと……落ち着いたか？』

『……』

『あゝ、えっと、なんだ……これも何かの縁だ。よかったら話を聞  
くぜ？』

『……え？』

『落ち込んだ時はな、人に話を聞いてもらおうといいんだそうだ。話  
してる内に自分の頭の中で整理ができて、少しは気分が軽くなるん  
だよ。この前読んだラノ……本にそうあった』

『……』

もしかして、私を慰めようとしてくれているのだろうか？  
意表を突かれて私が思わず沈黙すると、トオルは慌てた声を届け  
てきた。

『むむ……よ、余計なお節介だったか？ やっぱ、さっき出会った  
ところの得体の知れない奴には話せるわけないか』

そんなトオルの言葉で、私は漠然と彼の人柄を理解する。

多分、優しい人なのだろう。

まだ初対面に近い私に、親身になって慰めてくれる程には。

『……ううん、そんなことない』

私は首を横に振ってから、目尻に残っていた涙を拭う。

追い詰められていたせいか、私はその優しい誘いに縋り付いた。

私はあまり喋ることができないので、今までこんな風に誰かに話を聞いてもらったことはない。

でも、この心話と呼ばれる召喚獣との意思疎通には声は関係ない。最初はたどたどしく遠慮しながら話していたものの、そのうち私は胸に溜まっていた様々な感情を吐き出していた。

トオルは、もはや支離滅裂になってしまっている私の愚痴や弱音を、黙って聞いてくれる。

私が自分の声のことと、そのせいで学院での成績が最悪なことを話すと、トオルがポツリと呟いた。

『……俺と同じだな』

『え？』

『いや、こつちの話だ』

『……』

思わず聞き返してしまったが、トオルの言葉はしつかり私に伝わっている。

もしかすると、トオルも私と同じことで悩んでいるのかもしれない。

だがそのことを私が問う前に、トオルが言葉を続けた。

『つまりリーズは、その声が出にくくなる症状のせいで、魔法の呪文が上手く唱えられないんだな？』

『うん』

『そして期待してた召喚獣は、ただの携帯電話だったと……何だか悪いことしちゃったな……』

『ううん。トオルのせいじゃない。悪いのは私』

そう、恐らくは私が何かミスを犯したのだろう。

現に、召喚した対象と心話の対象がちぐはぐになってしまっている。本来の召喚対象はトオル自身であったのが、私の何らかのミスによって、その持ち物だけが召喚されてしまったのかもしれない。少し余裕の戻った頭で、私は自身の召喚術のことを振り返る。

その間に沈黙していたトオルが、ふと何かを思いついたよな声を届けてきた。

『……いや、待てよ？ リーズ、その魔法の呪文ってのは、他の何かに記録した音でも発動するの？』

『音を記録？ そんなことができるの？』

私が驚いた声を上げると、トオルはあっさりとそれを肯定した。

『その携帯電話ならできるぜ。とにかく、どうなんだ？』

『……魔力を持つ者が唱えないと、呪文は発動しない』

『うーん、じゃあ無理か……』

『でも、魔術師の召喚獣は魔力を主と共有している。だから、もし召喚獣が呪文を発声できるなら、その呪文は発動するはず』

『なるほどな。……一つだけ、戦いに使えそうな機能を思いついた』

私はそこまでの会話の流れで、トオルの意図することを理解していた。

たしかにそれならば、声によるハンデは埋められるかもしれない。微かにだが、私の胸の中に希望の光が灯る。

だがトオルが提案したそれは、私の想像を越えたものだった。

> i 3 4 5 8 9  
— 4 1 6 4  
<

## 第四話

異世界からの声が初めて届いたその日の夜。

リーズが試したいことがあると言っているので、その日の俺は早めに就寝することになった。

俺が完全に眠りに就くと、リーズの予測通り、俺の意識は自動的にリーズの元と収束する。俺の視界がリーズの視界と繋がると、リーズは丁度、女子寮から外に出たところであった。

リーズの視界に映る石造りの道が、斜め横からの淡い陽射しに照らされている様子を見て、俺は確認の声を届ける。

『これは、おはよう……だよな？』

『おはようでいい』

リーズが俺の疑問に、肯定の言葉を返した。

俺が自分の部屋のベッドで寝たのが夜の十一時過ぎぐらいだったのが、向こうはだいたい朝ぐらいの時間になるらしい。

リーズが俺の携帯電話を召喚した時、こちらの世界は六限目の十五時過ぎだった。つまり、リーズが召喚術を行っていたのは深夜頃だったということになる。

その後、リーズが一旦繋がりを切ったのは、女子寮にある自分の部屋に戻って寝るためだったのだろう。

あれから再びリーズから心話が届いたのは、夜の十一時前になってからである。

リーズとの話を終えた時、たしかこっちは下校時間寸前だった。

あれから、満足に寝られる程の時間があったとは思えない。

そんな俺の予測を裏付けるように、リーズの視界は酷くフラフラ

としていた。

『おい、大丈夫か？ あまり寝てないんじゃないのか？』

『大丈夫。三時間ほどは寝た』

『短っ！ 本当に大丈夫かよ……』

『大丈夫。慣れている』

『……』

慣れているということは、それぐらいの睡眠時間になるのはよくあるということだ。

それだけで、リーズのこれまでの生活が少し想像できた。

一体何がリーズをそこまで掻き立てているのか、俺は知らない。

ただ、リーズは自身の目的にただならぬ執着を持っていることは知っていた。

俺がリーズの体調を心配したところで、リーズは聞く耳を持たないだろう。

俺はそう判断して、今はそのことについて何も言わなかった。

『それにしても、お前が寝てもこっちに意識は飛ばないのに、俺が寝るとそっちに意識が飛ぶんだな』

『……』

『……何故そこで黙る？』

リーズのその不自然な沈黙に、俺は何か嫌な予感を覚える。俺がそれを問いたですより先に、リーズが素直に白状した。

『……実は私が寝ている間、私の意識はタオルと繋がっていた』

『えっ、だったら何で声を掛けてくれなかったんだ？』

『……私が寝た時、タオルは……その……』

『あっ』

リーズが寝たのは、恐らく今から三時間とちよつと前だろう。たしかその時間は、丁度俺が風呂に入っていた時だった。

それで俺は、リーズが何を口籠もっているのかを理解する。

『……もしかして、見たのか？』

『ごめんなさい。寝ている間は、どうしても意識を切り離せなくて

……』

『……』

俺はその事実、恥ずかしさのあまり絶句してしまった。元の世界での俺の体は今、寝相で身悶えている自信がある。

だが、そこはやはり俺も年頃の男。

俺はそれに憤慨する前に、もう一つの事実思い至った。

『つまりそれは、逆の場合も意識を切り離せないんだよな？』

『……』

今度は、リーズのほうが沈黙する。

その沈黙を肯定と見なし、俺は内心で歓喜した。

『あ、あまり見ないで欲しい……』

『いや、そう言われてもよ』

『……トオル、喜んで？』

『えっ、あ、いや、そ、そんなことはないよ？』

どうやら思わず言葉が弾んでいたらしい。

あからさまに動揺した俺の声を聞いて、リーズは諦めたように嘆

息した。

『……仕方ない。私も我慢するから、トオルも我慢して欲しい』  
『あ、ああ』

要するにお互い様ということなのだろうが、俺のほつばかり得があるように感じるのは、俺が男だからだろうか？

思えば自分の携帯電話を異世界に召し上げられてしまったことも、今となってはどうでもよくなっていた。

どうせ、電話を掛けてくるような友達もないのだ。何か連絡があったとしても、せいぜいがたまに親がメールを送ってくるぐらいである。

そんなことよりも、今の俺はリーズの視界を通して見える世界に夢中になっていた。

何せ、異世界である。

しかも魔法が存在している上に、こっちの世界でいう中世の西ヨーロッパに近い建築物が並ぶ異世界だ。

ライトノベルの中でも富見ファジア文庫をこよなく愛する俺にとって、その世界は堪らなく魅力的に映った。

さらには、リーズは俺にとって初めての友達になる。

可愛い女の子である友達と会話ができて、おまけにファンタジーな異世界を体験できるというのは、俺にとって少しばかり高い携帯電話よりもずっと価値があった。

俺は気分をワクワクさせながら、今のリーズの行く先を聞いてみる。

『ところで、今は何処に向かっているんだ？』



『今から、あの校舎で朝の授業がある』  
『へえ。そういうのはこっち世界の学校と似てるんだな』

俺がなんとなくそう呟くが、その言葉はリーズが視線を向けた建物を見て、すぐに撤回することになった。

ローマの円形闘技場を少し小さくしたような外観のそれに、俺は思わず感嘆の声を漏らす。

『大きいな……いつもあそこで授業やってんのか？』

『合同の授業はいつもあそこ。午後からの選択授業になると、もう少し小さな場所で授業を行う』

と、リーズが今度は逆の方向に視線を向ける。

ゴシック様式に酷似した石造りの城のような建物が、その視界の中央に映った。

『いや、あれも十分大きいから。お前の世界の学校って大きいんだな……』

『こちらの世界の中でも、この学院は特別。他にも様々な施設や領域があつて、島一つが全て学院の敷地になっている』

『ははっ、島一つって何だよ。そりゃスゲーな』

俺が言葉を弾ませると、リーズが不思議そうに首を傾げる。

『トオル、楽しそう』

『ああ、楽しいぜ？』

『そうか』

『……？』

何やら妙な様子のリーズに、今度は俺が首を傾げた。

そのことで俺が何かを言う前に、リーズが言葉を続ける。

『トオル』

『ん？』

『トオルの目には、この世界がどう映っている？』

『……………』

何やら意味深なリーズの言葉に、俺は押し黙った。

なんとなくリーズの声色に諦念のようなものを感じ取り、軽々しく答えることができない。

俺がその質問に答えられず沈黙していると、リーズはまた違う質問をしてきた。

『トオルの世界にも学校があるのか？』

その二つ目の質問は、俺もすんなりと答えられた。

『ああ、あるぜ。お前の通ってる学校よりは数段スケールは落ちるがな』

『私も、そちらの世界に興味がある。トオルの学校を見てみたい』

『いいぜ？ 学校と言わず、色んな場所を案内してやるよ』

『ありがとう』

『その代わり、俺が案内する時はちゃんと寝るよ？』

『……………』

俺のその言葉には答えず、リーズは目的の校舎の中へと入っていた。

## 第五話

私が大講堂の中に入ると、既に同学年である一年生の生徒のほとんどが来ているようだった。男女あわせた全一年生を収容してもまだ余裕のある規模の屋内は、教壇を中心としてなだらかなすり鉢状のようになっており、それに合わせて湾曲した長机が段々に設置されている。

別に座る席が指定されているわけではないのだが、親しい者とグループを形成して座っている生徒達は、自然と同じような位置に固まって陣取っていることが多い。

私もその例に漏れず、自分がいつも座っている位置にて、いつも一緒に授業を受けている友人が先に着席して私を待っていた。

その友人であるエルヴィ・パルムグレンは、私の姿を遠目に確認するなり、快活な笑顔を浮かべて手を振ってきた。私もそれに応じて、控えめに手を振りながらエルヴィの元へと歩み寄る。

『あれは誰だ？』

『私の友達。私と違って、とても優秀な人』

トオルの疑問に答えながら、私はエルヴィの隣の席に座った。

「リーズ、おはようです！」

「おはよう」

「あらあら、髪が跳ねてますよ？」

エルヴィはそう言って、手ぐしで私の頭を梳かし始める。

それが心地よくて目を細めると、何故かエルヴィのほづが何とも

言えない顔をして喜んだ。

「ん、今日もリーズは愛らしいです」  
「……」

何か釈然としないものを感じつつもエルヴィに頭を預けていると、机の上に置かれていたエルヴィの鞆が、唐突にゴソゴソと動く。

その鞆の口から、耳の長い小型の獣のような何かが顔を出した。どこか無垢さを感じさせる黒い瞳と、全身が柔らかそうな灰色の毛皮で覆われているそれは、まるで愛玩動物のような愛嬌がある。

私がそれを見て首を傾げると、エルヴィもそれに気がついた。

「紹介が遅れましたね。その子が私の使い魔なのです。名前はモクというらしいですよ」

「鞆に入れるのは……どうかと思う」

「なんでか狭い所に入りたがるんですよ。鞆にも自分から頭を突っ込んでいただけで、私が押し込んだわけではないのです」

私は召喚獣の種類についての知識は豊富である自信があるが、そのモクという使い魔の姿は私の知識にないものだった。

私がそのことを問う前に、私の疑問を察したエルヴィがモクの補足をしてくれる。

「どうやら新種の使い魔らしいです。学院の記録にないので、詳しいことはまだ分からないのですよ」

「そう」

私とその珍しい使い魔を眺めていると、モクが私に向かって鼻をぴすぴすと動かしてから、私の膝の上へと跳び乗ってきた。

続けてその長い耳ごと頭を、私に擦りつけてくる。  
その甘えるような仕草は、本当に愛玩動物のようだった。

「リーズのことが気に入ったようですよ」

「そう」

『……可愛いな』

『うん、凄く可愛い』

私はなんとなく、甘えてくるモクの頭を撫でてみる。

その様子を眺めていたエルヴィが、頬を人差し指で掻きながら、  
おずおずと聞いてきた。

「それでその……リーズは上手く召喚できたのですか？ 課題の期

限は明日までですが……」

「できた」

「本当ですか!？」

途端に、嬉しそうな声を上げるエルヴィ。

今はもう私の声のことを知っている彼女は、どうやら私の心配を  
してくれていたらしい。

「それで、リーズの使い魔は何処にいますか？ 見たいですよ」

エルヴィが目を輝かせて辺りを見回す。

私が自分の使い魔を取り出すべく鞆に入ると、それを見た  
エルヴィが苦笑した。

「リーズも自分の使い魔を鞆に入れているじゃないですか」

「……」

私が何も言わずエルヴィに自分の使い魔を渡すと、エルヴィが不思議そうな顔でそれを掲げた。

「小さいですね……これがリーズの使い魔なのですか？」

「うん」

「……全く動かないんですが、これは眠っているのですか？」

「起きています」

「名前は何と言うのです？」

「ギャラクシー」

「種族は分かるのですか？」

「ケイタイデンワ」

「むむ、恐らく新種ですね？」

「うん」

エルヴィが難しそうな顔をして唸っていると、私の頭の中でトオルがポツリと呟いた。

『うむ……これぞ健康美人』

「……エルヴィのこと……気に入ったらしい」

「むむ？」

エルヴィが私の顔を見て首を傾げる。

と同時に、私達の背後の席から盛大な笑い声が響いた。

私とエルヴィがそちらに視線を向けると、長く艶やかな光沢のある黒髪に、雪のような白い肌をした少女が視界に映る。

扇子と呼ばれる道具を口元に当てつつ、高らかに哄笑するその少女を、私はよく知っていた。

『うお、今度は和風美人っ！』

「シズルも……気に入ったらしい」  
「節操のない使い魔ですね……」

私とエルヴィの反応に戸惑ったのか、シズルという名の少女が笑い声を止めて咳払いをする。

ふと気がつけば、周囲の生徒の視線がエルヴィとシズルに集中していた。

シズルとエルヴィは、同じ一学年の中で常に成績の上位争いをしている有名人である。

さらには、シズルの服装は学院全体の中でも特に悪目立ちしていた。

ヴィントレーゼ魔術学院は、全ての生徒に黒いローブの着用を義務付けている。

学院に在籍しているほとんどの生徒がそれを忠実に守っているのに対し、シズルはそれを無視して出身国の民族服に身を包んでいた。通常はランク戦と呼ばれる特別な試合と自分の部屋以外では、学院内での自由な服装は認められていない。だが、シズルの産まれた家の身分の高さと、その類い希な好成績によって、教師達はシズルの服装を黙認している状態なのである。

その特異な服装と好成绩によって、無駄に存在感を發揮しているシズルの発言というのは、同学年の生徒に注目されやすい。今のこの場面でも、シズルは大いに目立って周囲の視線を集めていた。

そのシズルが、私に向かって嘲笑うかのような声を上げる。

「それがお主の使い魔じゃと？ それは何の冗談じゃ？」

「……」

私が押し黙ると、シズルはますます笑みを深くして私を揶揄した。

「ただでさえ落ちこぼれだというのに使い魔がそれでは、もうお主には見込みがないのう。そろそろ諦めはついたかえ？」

「……」

『何だこの嫌味な奴は……』

『シズルは悪い人ではない』

『そうなのか？』

『うん。だって彼女は』

そこでエルヴィが、私の顔を心配そうに覗き込んでくる。どうやらエルヴィは、トオルと話しているせいで沈黙していた私を、落ち込んでいると勘違いしたらしい。

「リーズ、気にする必要ないです」

「気にする必要、大ありじゃ馬鹿者」

シズルはその顔から笑みを消し、先程とは打って変わって真剣な視線をリーズに向けた。

「お主が落ちこぼれるのは、お主の勝手じゃ。じゃが、ランク戦に参戦するのは二人一組である必要がある。どうせお主らは互いに組むつもりなのじゃろう？ それでは、エルヴィの足を引っ張ることになるぞ？」

「シズル、いい加減にしないと」

「わらわはリーズと話しておる。お主は黙っておれ」

シズルがそう嗜めるが、エルヴィは尚も何かを言おうとして口を



開く。

だが、エルヴィが何か言葉を発する前に、それを私が片手を挙げて制した。

「リーズ……」

「お主なら分かるはずじゃぞ？ エルヴィは将来、Aランクにまで上り詰める可能性がある。じゃがそれには、やはりそれ相応の相手と組む必要があるじゃろう。そう、例えばわらわのような実力が拮抗した者とな」

そのシズルの言葉を受けて、エルヴィが眉を吊り上げた。

「誰がシズルなんかと」

「その通りだ」

「リーズ！？」

私がシズルの言葉に同意すると、エルヴィが悲鳴に似た声を上げて私を見た。

恐らく私が、シズルとエルヴィが組むことを認めたように思ったのだろう。

だが、私の言葉はそこで終わらない。

「だから……私と勝負」

「ほう？」

私は、シズルの真意がなんとなく分かる。

つまりシズルは、私がエルヴィの可能性を潰すかもしれないことに怒っているのだ。

だからこの提案ならば、どう転んでもシズルは納得するはずだった。

「勝ったほうか……エルヴィと組む」  
「……その言葉、偽りはないな？」

シズルが視線を鋭くすると、私はそれにはつきりと頷いてみせる。

「うん」

私の返事に唇の端を上げたシズルが、手に持っていた扇子にパチンと音を鳴らして畳んだ。

「よかるう、なら勝負じゃ。日取りは、私達がランク戦に参加できるように三日後。仮のペアを作って参戦し、私かリーズ、勝ったほうが改めてエルヴィと組む。それでよいな？」

「いい」

学院生にとって、使い魔との融合が許可されるのはランク戦時のみ。

だから自然と勝負の日取りが、一年生にとって初めてのランク戦の日になった。

「リーズ……大丈夫なのですか？」

「大丈夫……多分」

不安そうに眉をひそめるエルヴィに、私はわりと本気の自信を込めて頷いた。

トオルが提案したことが本当に可能ならば、勝機は十二分にある。

だがそんな私の楽観は、上から舞い降りてきたものによって、早々に打ち碎かれることとなった。

丁度、人の身長の半分ぐらいの大きさをしたソレが、シズルの隣の中空にて制止する。

「紹介が遅れたの。これがわらわの使い魔じゃ」

誇りと自負を込めて、シズルはその使い魔を私達に披露した。その姿に、エルヴィは驚愕の声を上げる。

「リーズ、この使い魔は……」

「……うん」

縦長の瞳孔をした双眸に、伸縮性のある膜のような二枚の翼。全身が蒼い鱗に覆われ、頭にはソレにとって象徴的な二本の角。

それはあまりにも有名で、誰もが知っている最強の使い魔

「ドラゴン」

その種族名を呟く私の声が、微かに震えた。

## 第六話

リーズの通っている学院は、思っていたよりも早めに授業が終わった。

俺の通っている高校ならば、後一時限か二時限は授業があるだろうという時間である。

リーズ曰く、本来はこの後にランク戦の予備時間と試合があるらしい。

だが一年生がランク戦に参加できるようになるのは三日後からなので、授業が終わればもうその日の予定は終わりであった。

半数以上の生徒は、それから親しい友人などと一緒に遊びに行ったりするらしいのだが、生憎と今のリーズにそんな余裕はない。

学院の授業が終わるなり、リーズはすぐに女子寮へと戻って、自分に割り当てられている部屋に引き籠もることになっていた。

『ごめん、今日はトオルにこっちの世界を案内しようと思っていたのだけど……』

『気にすんな。今はそれどころじゃないんだろ？』

『うん……ありがとう』

リーズが心話で俺と会話しつつ、早足で女子寮へと戻る。

俺はリーズから学院の女子寮に住んでいると聞いた時、漠然と自分の世界の学生寮と同じ二人部屋のようなものを想像していた。

しかしリーズが帰ってきた建物は、中世で栄華を極めた貴族の館をさらに巨大にしたかのような、壮麗な屋敷であった。

リーズが割り当てられている部屋の内装も、洗練されたゴシック様式の芸術品のような装飾が、いやらしくない程度に施されている。

しかも入り口の扉から見えるだけでも、個室が二つ以上あるような広さだった。

『広っ！ 一体何人用の部屋なんだよ』

『一人用』

『マジかよ……』

リーズは自分の部屋へと帰ってくるなり、すぐに実技用に使っているという個室へと入る。

シズルの使い魔を見てから、リーズはずっと焦っているようであった。

俺の知る創作物のファンタジーでも、ドラゴンという架空生物は定番中の定番である。

数ある作品の中でも、ドラゴンは強力な存在として綴られている物語が多い。

やはりリーズの世界でも、ドラゴンというのは強力な召喚獣なのだろうか？ 俺がその旨をリーズに聞くと、予想以上に深刻な言葉が返ってきた。

『ドラゴンにも個体差はあるけど、種族でいえば間違いなく最強。

相手の使い魔がドラゴンというだけで、大抵の者は歯が立たない』

『そんなに強いのかよ……』

『基礎能力が違う。ドラゴンと融合した術者は、その拳を振るうだけでも小さな魔法並の攻撃力がある。さらには、各個体それぞれの強力な特性を持っていることが多い』

俺に届くリーズの声が、わずかに沈んだ。

『……正直、勝算は薄いと思う』

『…………』

戦う前から弱気になるな、とは言えなかった。

俺はそのドラゴンが、どれほど強力な召喚獣なのかを見たことがないのだ。

何も知らないまま、無責任は励ましはできない。

そのことが、俺は歯痒くて堪らなかった。

でも、リーズには俺が励ます必要もなかったようである。

『でも、私は勝ちたい』

弱気になりそうな自分を奮い立たせるように、リーズはその言葉に力を込めた。

『勝って私は、エルヴィと一緒に組みたい』

『そうか。友達だもんな』

俺が若干羨ましく思いながらそう言うと、リーズはそれを否定した。

『エルヴィは友達だけど、それとこれとは話が別』

『そうなのか？』

『真剣に上を目指すなら、組む相手を選ぶのに私情は抜くべき』

リーズは事も無げにそう言ってみせる。

案外、リーズとシズルは似たもの同士なのかもしれない。

『それにしても、そんなにAランクになるっていうのは厳しいのか』

？』

『うん。ドラゴンを使い魔に持つシズルでも、組む相手が悪ければ、とてもAランクにはなれない』

『マジか……』

リースの説明によると、ランクとは学院が定めている強さの基準のようなものらしい。

段階はGからAまであって、ランクが高ければ高いほど、卒業後の待遇が良くなるそうだ。

基準の最高位であるAランクでの卒業生ともなると、それぞれの国の歴史に名前を残している者が沢山いるのだとか。

だがAランクに到達できる者は、世界中から集まった多くの生徒の中でも、ほんの一握りしかない。

最上級生である六学年の生徒でさえ、半数以上はDランク以下で燻っているのだ。

選ばれた少数の実力者のみが到達できるランク。

リースの目的は、そんな領域にある。

その最初の段階で躓かない為にも、リースは何としてでもシズルに勝っておきたかった。

『だから今は、できうる限りのことをしておきたい』

『そうか。俺も自分にできる範囲で協力するぞ』

『ありがとう』

俺はリースの視界に映る自分の携帯電話を見ながら、リースに操作を指示して必要なアプリをダウンロードさせる。

後はリースがそのアプリを使って呪文を録音し、俺の家のパソコン

ンへとファイルを送信する手筈になっていた。

『録音する呪文はもう決まっているのか？』

『うん。シズルの使い魔の属性と能力はだいたい予測がつく。だから、それに対応できる魔法を録音する』

『属性はまだしも、能力なんて外見から分かるのかよ』

『召喚獣の特徴で分かる。私は知識だけは、それなりにあるつもり』  
『そうだったな……』

俺は今日の授業を見ていて、リーズについて分かったことが一つある。

リーズは魔法や召喚獣などの知識に関しては、エルヴィヤシズルと比べても劣っているわけではないのだ。

ただ学院はあくまで呪文の練度を測るので、成績を決める時はほとんどが実技による評価になる。

いくら知識があっても、途中で呪文を途切れさせて失敗してしまうリーズは、どうしても成績が振るわないのである。

もし学院のテストが、俺の世界の高校と同じような筆記試験だったならば、リーズは成績のトップ争いをしていたかもしれないのだ。

それほどの努力を、リーズはしている。

だがこれまで、寝る時間をも惜しんで勉学に励んでも、リーズが報われることはなかった。

俺ならとつくにいじけて開き直っていた自信がある。

それでなくても、Aランクになるという目標は諦めていただろう。

でも、リーズはいじけることも諦めることもなかった。

それは凄いいことだと感心するのと同時に、がむしゃらすぎて生き急いでるかのような印象も受ける。



そのリーズの前のめりな原動力は何からくるのだろうか？  
俺は何故かそれが無性に気になって、思わずリーズに話しかけていた。

『なあ、リーズ』

『何？』

『えっと……』

だがそこで、俺は躊躇ってしまふ。

俺はそれを、本当に聞いていいのだろうか？

人は誰でも、言いたくない事の二つや三つはある。前に話を聞いた時に、リーズがそのことに触れなかったのは、俺に話したくないからではないか？

そんな考えが、俺の頭の中でぐるぐると回る。

『頑張れ』

結局、俺の口から出てきたのはそんな言葉。

『うん、頑張る』

リーズはそれに力強く頷いた。  
ヘタレで情けない自分に、俺は内心で溜息をつく。

その頃、「エルヴィを取り合つてシズルとリーズが決闘をする」という噂が一年生の間で広まったせいで、外ではちよつとした騒ぎになっていた。

ずっと部屋に引き籠もっていたリーズは、それを知る由もない。リーズがそのことに初めて気がつくのは、次の日の朝になってからであつた。

## 第七話

シズルとの勝負が決まった次の日の朝。

油断すれば閉じてしまいそうになる瞼を片手で擦りながら、私は朝の授業を受けるべく、大講堂の中へと足を踏み入れた。

流石に一睡もしていないのは堪えなのか、自分の体が鉛のように重く感じる。それでいて、何か足下が浮いているかのような、ふわふわとしたものがあつた。

そのせいで、私は大講堂内の異変を認識するのに、数瞬遅れる。気がつけば、先に来ていた生徒達の視線が、ほとんど私に集中していた。

『な、なんだこれ？ 何が起きてんだ？』

丁度、向こうの世界で眠りに就いたトオルが、私の頭の中で困惑の声を上げる。

私を見て何やら楽しそうに騒ぐ同級生達を眺めて、私は首を傾げた。

『分からない。朝の授業を受けに来たら、こうなっていた』

トオルの言葉に答えながら、とりあえず私はいつも座っている席へと向かう。

私が先に来ていたエルヴィの元へと辿り着くと、同級生達が一層騒がしくなった気がした。

「リリース、気にすることないですよ」

頭に疑問符を浮かべる私に、不機嫌そうな様子でエルヴィがそう言う。

いつも陽気で明るいエルヴィにしては珍しいその反応が気になって、私は口を開きかけた。

だが私がエルヴィに何かを聞く前に、やわらかく丸みを帯びた声が、前の席から割り込んでくる。

「おはようリーズ。ねえ、エルヴィを取り合ってシズルと勝負することになったって本当なの？」

その声の主には視線を向けると、赤髪を顎の下あたりにまで伸ばした少女が、目をきらきらと輝かせて私を見ていた。

私と同じぐらいの小柄な体型なのに、私と正反対の大きな胸を持つその少女は、カルディナ・オウドリードという名の同級生だ。

毛先が波のようにうねった髪型と、少しだけ目尻の低い双眸は、その実年齢よりもかなり幼い印象を受けるのに、胸だけは大きい。

そのアンバランスさが一部の男子生徒を魅了するらしく、カルディナはかなりモテるらしかった。

そして、それはトオルも例外ではなかったようである。

『これは……何というロリ巨乳……』

『……ロリって何？』

『ロマンのことだ』

『……』

トオルの嬉しそうな声に、どこか面白くないものを感じつつ、私はカルディナの質問に頷いた。

「うん」

「ふわあ、本当なんだ……三角関係だよ、愛憎劇だよ」

カルディナは、その豊満な胸の前で祈るように手を組み、面白がるような声を上げる。

そのカルディナの言葉によって、私は教室で皆が騒いでいる理由をなんとなく察した。

「この騒ぎは……それが原因？」

「そうだけど、それだけじゃないよ」

カルディナがそう言うと、その肩の上に羽根のような耳をした何かが、ぴよこりと顔を出す。

人間の膝下ぐらいの大きさをした、ウサギ科のような外見のそれは、私の記憶が正しければグレムリンという種類の召喚獣だ。

それを使い魔にする術者の趣味なのか、その上半身には専用についたと思われる緑色の上着と、赤いリボンが身に着けられていた。

自身の肩に張り付いているグレムリンに視線を向けて、カルディナが首をコクコクと頷かせる。

恐らくは心話をしているのだろう。つまり、そのグレムリンはカルディナの使い魔らしかった。

「ふむふむ、だいたいみんな賭け終わったみたい」

「……何の話？」

「明後日の勝負で、どっちが勝つのか………というよりは、どのくらいの時間でシズルが勝つのか、みんな賭けをしていたの。今のところ、秒殺に賭けている人が一番多いんだよ」

人懐っこそうな笑顔を浮かべて、さらっと毒を吐くカルディナ。

それに、むっつりと黙っていたエルヴィがますます不機嫌そうな顔

になる。

私の頭の中で、それを見たトオルが呻いた。

『うわぁ……こいつ、何だかすっげえ腹黒い気がする』

『……カルディナは自分に正直な人』

『黒いのは否定しないのな』

『……………』

トオルと私がそんなことを話しているとも知らずに、カルディナがニコニコとした表情のまま言葉を続ける。

「それでね、さっきエルヴィがね」

「カルディナ！」

エルヴィの鋭い声によつて、カルディナが怯んで言葉を吞んでしまふ。

私はそれに嫌な予感を覚えて、カルディナに続きを促した。

「カルディナ、教えて」

「で、でも……」

言葉を濁しながら、鋭い視線を送り続けてくるエルヴィをちらちら見るカルディナ。

私は彼女が意図することを把握し、それを伝えた。

「大丈夫……エルヴィのことは……気にしないでいい」

私がそう言うと、カルディナはおずおずと先程言いかけたことを再び口にする。

「えっと、みんなが賭けをしているのをエルヴィが知ってね。それで、その詳細を聞いた途端、怒って一人だけリースが勝つほうに大金を賭けちゃったの。持つてるお金、全部賭けてやります〜って叫んだよ」

「……………」

私が無言でエルヴィに目を向けると、エルヴィは視線を逸らして口笛を吹いた。

無駄に上手いその口笛は、耳に心地の良い軽やかな音を奏でる。だがそんなことで、私が本当に誤魔化されるわけがない。

「エルヴィ」

私の呼びかけに、エルヴィは決まりが悪そうな顔をして口笛を中断し、視線を私に戻した。

「な、なんですか？」

やや上擦った声になるエルヴィに、私は語気を強くして戒める。

「まだ間に合う……………取り下げるべき」  
「嫌です」

だが、エルヴィはキツパリとそれを拒否した。  
私はそれでも諦めず、エルヴィの説得を続けようとする。

「だってエルヴィは……………」

「私が誰に賭けようと私の勝手です！ それに、リースが勝てば何も問題はないですよ。私は最初からリースが勝つと思っていますし」  
「エルヴィ……………」

私とエルヴィは、この学院で入学以来の付き合いである。  
こうなったエルヴィは、何を言っても聞かないほど頑固なのを、  
私は経験によって知っていた。

『どうしようトオル。私は絶対に勝たなくちゃいけなくなった』  
『どういうことだ？』

『詳しいことはエルヴィの私事に関わるから言えない。でも、エル  
ヴィがお金を失ってしまうのは不味い』

『それなら、最初から金を賭けるなよ……』

『エルヴィは優秀だけど、感情的になりやすい傾向がある』

『まあ、昨日の様子からしてもそんな感じだったな……』

そのエルヴィは、隙だらけのファイティングポーズを取って、よ  
く分からない励ましの言葉を私に贈る。

「リーズ、ファイトです！」

「キユ！」

それに合わせて、机の上にいたモクが、エルヴィと同じ構えを取  
って鳴いた。

その姿が若干、変化しているように見えるが、今の私はそれど  
ろではない。

『……今回のことは、私の責任。私がシズルに勝負を持ちかけたせ  
いで、話が拗れた。もし私が負けると、エルヴィにも無視できない  
影響を与えてしまう。……どうして私は』

『そんな風に自分を責めるのは、何か違わないか？』

自嘲混じりのような私の弱音を、途中でトオルが戒めた。



『……「うめん」』

『いや、謝ることはねーけどよ』

『……』

私が沈黙すると、トオルが慰めるような声色で言葉を続ける。

『とりあえず今は、やれるだけの準備をするしかねーよ』

『……うん』

自分の勝敗次第で、自分以外の運命を巻き込むかもしれないことに、私にのしかかる重圧が数段増した気がした。

その時、私は焦りと自責の念に駆られるあまり、トオルがポツリと呟いた言葉を聞き流してしまふ。

『なんとかなると思うんだけどなあ』

それから二日後、リースとトオルは、運命の勝負の日を迎えた。

> i 3 4 5 8 7 — 4 1 6 4 <

## 第八話

俺が住んでいる地域の空気では、もはや考えられないほど綺麗に澄み渡った青空の下。

まだ日中の明るい陽射しの中だというのに、その塔はおどろおどろしい存在感を保っていた。

島の北側に存在する、狭間の塔と呼ばれる建築物。

その何の装飾も施されていない要塞のような石の塔は、まるでそれが飾り代わりだとも言わんばかりに蔓や苔に覆われており、その古さを体現している。

今日は、一年生が初めてランク戦に参加できる日。

リースの話によると、今からこの塔の中の一室で、シズルとの試合を行うらしいのだが……

『こんな場所で試合できるのかよ？ てっきり大きな闘技場でもあるのかと思ってたんだが……』

『入れば分かる。観客が沢山入れる専用の闘技場はあるけど、そこで試合ができるのはAランクだけ』

俺にそう説明しながら、リースは強い陽射しから目を守るように、黒い広つば帽子を深く被り直した。

ランク戦の時は自由な服装が認められるらしく、今のリースは黒いスカートに白いブラウスの上から広幅の黒マントと、ほとんど黒づくしの格好をしている。

その姿は、俺の知るファンタジーの魔術師でも定番のものである為、何の違和感も驚きもなかった。

だが、リーズの隣にいるエルヴィの格好はそうもいかない。

エルヴィは、こっちの世界の南国あたりにいそうな、踊り子のよ  
うな衣装に身を包んでいた。

その肌の露出の多い民族服は、エルヴィのスレンダーなスタイル  
と艶やかな褐色肌も相俟って、何とも言えない色気を放っている。

塔の前では、他の一年生達やGランクの上級生など、大勢の人間  
が行き交っているのだが、その中でもエルヴィの服装はかなり目立  
っていた。

できれば俺もエルヴィの姿で眼福にあずかりたいのだが、そんな  
俺の邪な心を察したのか、リーズは中々エルヴィの姿を視界に入れ  
てくれない。

そんなリーズの様子を、エルヴィは賭けのことを怒っていると勘  
違いしたのか、気まずそうな顔でリーズをちらちら見ていた。

リーズはそれに気がついていてるものの、賭けのことについて思う  
ところがあるのは事実なので、あえて黙っているようである。

しばらくそのまま待っていると、もう一人の奇抜な格好をした少  
女であるシズルが、リーズ達に近づいてきた。その隣には、黒い口  
ーブのままの姿のカルディナもいる。

俺の世界の和服に酷似したシズルの服装は、紺色の比較的落ち着  
いた柄をしているものの、学院生はわりと西洋的な服装をした者が  
多いので、やっぱり目立っていた。

そのシズルがリーズ達の傍に来ると、開口一番に眉をひそめる。

「すまん、すまん。待たせたのう……なんじゃエルヴィ？ その妙  
な格好は？」

「シズルにだけは言われたくないですよ……」

手を腰に当てて、半眼で言い返すエルヴィ。

そんな二人を尻目に、リーズはカルディナに確認をした。

「あなたがシズルの？」

「今回だけね。私の役目は賭けの結果を見届けるだけだよ。私のグレムリンなら、正確な時間が測れるからね」

「そう」

リーズが頷くと、シズルが挑発的な笑みを浮かべながらリーズの前に立った。

その目に「自分が負けるわけがない」という自信と自負を内包させて、リーズの双眸を見据える。

リーズも、それに応じて強い視線をシズルに返した。

「さあ、覚悟はいいかえ？ 予め言っておくが、わらわは一切手を抜くつもりはないぞ？」

「……望むところ」

「よろしい」

シズルは満足そうに頷くと、カルディナを引き連れて塔の中へと入っていく。

リーズとエルヴィも、その背中に続いた。

塔の内部は、壁を這う巨大な螺旋階段によって構成されていた。それも上階ではなく、地下にどこまでも続いていく石の階段である。

その壁沿いには均等の間隔を置いて、木製の扉が無数に備え付けられていた。その扉と扉の間には突き出し燭台に松明が挿してあり、塔内の闇を払うべく赤い光を揺らめかせている。

弧を描く階段の中心にある空洞から下を見ても、その底がどこまで続いているのかが分からない。永遠と続く松明の炎が、まるで地下の冥界に運ばれる魂のようにも見えた。

『不気味なとこだな』

『うん。少し怖い。何か出そう……』

『……お前、もしかしてお化けとか駄目なのか？』

『……』

リースは俺の質問に答えずに、シズル達に続いて階段を降りていく。

その広幅の階段では、下に降りていく生徒だけでなく、上に戻っていく生徒も見受けられるようだった。

喜ぶ者や悔しそうな者など、その表情は人よって様々ではあるが、いずれも全くの無傷で戻っていく生徒達に、俺は首を傾げる。

『上に戻っていく奴らって、試合が終わったんだよな？ 誰も怪我一つ負ってないようだけど、そんなもんなのか？ 実はあまり怪我をしないような試合だったり？』

『怪我はする。でも、生徒に死傷者が出ないよう最大限の安全策が施されている』

『試合が終わったら、すぐに回復魔法を使ってくれる人が待機してるとかか？』

『ちよつと違う。……それも、試合が終われば分かる。言葉では少し説明しにくい』

『ふむ？』

俺とリーズがそんな会話をしていると、やがてシズル達の足が、一つの扉の前で止まった。

「この扉でいいのの？」

「え〜と、一一二〇号室。うん、この扉でいいみたい」

カルディナが、扉に刻まれている数字を確認して頷く。

それは学院にリーズ達が試合の申請をした時に、あらかじめ指定されていた番号だった。

「私、ここから先に行くのは初めてですよ 楽しみですね」

「うん」

エルヴィが楽しそうに声を弾ませるのに、リーズも同意する。

リーズによると、新入生にとってここから先は、誰もが未知の領域であるらしい。

それはシズル達も例外ではなかったらしく、そのドアノブを握るシズルが、緊張の面持ちで扉を開け放った。

次の瞬間、リーズ達の視界に、広々とした草原の光景が飛び込んでくる。

そこにある見渡す限りの草花が、沈みゆく日の光によって黄昏の色に染められ、ささやかな風に揺れてさわさわと音を鳴らしていた。

急に様変わりしたリーズの視界に俺が戸惑っていると、リーズが頭の中で、俺にその説明をしてくれる。

『ここは、狭間の世界。召喚獣達が住まう場所』  
『マジかよ』

リーズによると、この狭間の世界というのはヴィントレーゼ魔術学院のある島からのみ繋がっているらしい。同じく使い魔の召喚も、この島でのみ行えるのだとか。

だからこそ、この島に魔術学院が作られたのだ。

つまり学院にいた召喚獣達は、元々この世界にいたということである。

『でも、俺のいる世界じゃなさそうだぞ?』

俺は、自分のいる世界では見たこともない異形の鳥(?)が空を飛んでいるのを見て、そう判断した。単に俺が知らない種類という可能性も考えられるが、翼が四枚もあって、頭が二つある鳥なんぞ聞いたこともない。

『うん。だから、トオルのケイタイデンワをこっちの世界に召喚してきたのは、とても不思議なこと』



何がどうなって、俺の携帯電話がそちらに召喚されたのかは分からないらしい。

分からないことを今考えても仕方ないし、俺にとってその原因については、あまり興味がなかった。

今はそんなことよりも、リーズの視界を通して見える爽やかな光景を堪能する。

だがこの光景は、肝心の学院生達には評判が悪いようだった。

「初めての試合がただの草原とは……ついてないのう」

「そうだね。先輩が言ってた虹色に光る峡谷が見たかった」

「いやいや、これはこれで綺麗ですよ　まあ、珍しい光景とは言い難いですが」

シズル達が口々に好き勝手なことを言いあってる内に、いつの間にかそれは空に存在していた。

丸い球体の形をした、白い光の塊のようなものが、リーズ達の頭上でふわふわと浮いている。

皆がそれに気がつく、それはゆっくりとリーズ達の傍へと降下してきた。

やがてそれが、丁度皆の視線ぐらいの高さで静止すると、その場にいる全員の前で中性的な声を届けくる。

> ようこそ狭間の世界へ。これより、五分後に試合を開始する。試合に参加する者は、各々の召喚獣と融合せよ。試合を放棄する者は、その扉から元の世界に帰られたしく

まるで決められた文面を棒読みしているかのようなその声に、リーズ達は顔を見合わせた。

『なんだこれ？』

『多分、ランク戦の審判。ヴィントレーゼの初代学院長の使い魔だと言われている。同様の個体が無数に存在していて、入り口の扉の近くに待機しているらしい』

『へえ、何だか凄そうな奴だな……』

リーズの説明によると、制限時間である十五分を超過するか、一定以上のダメージを体に蓄積させると、この審判によって強制的に外へと送還されてしまうらしい。

その審判に指示に従って、リーズとシズルは使い魔と融合することになった。

今回の勝負はあくまでリーズとシズルの決闘であるので、エルヴィとカルディナは使い魔とは融合せずに、リーズ達から距離を取る。

「リーズ、ファイトですよ！ リーズならきつと勝てます！」

「キュキュ！キュ！」

遠くで声を張り上げて声援を送るエルヴィに合わせて、その頭によじ登ったモクが、興奮した鳴き声を上げる。

気分を奮い立たせるよりは、思わず和んでしまいそうになるその応援に、リーズは苦笑した。

リーズのその笑みを見て、距離を置いて向かい合っていたシズルが、からかうような声を上げる。

「余裕じゃのう。もしかして、わらわは見くびられておるかえ？」

「……みくびってない」

「それならよい。初めての戦いが、あっさり終わってもつまらんから。せいぜい藻掻くがよいぞ？」

「……」

自分の勝利を微塵も疑っていないシズルにリースが沈黙すると、先にシズルの使い魔が眩い光に包まれた。

まるで引き寄せられたかのように、その光がシズルの中へと入り込むと、今度はシズルの体が、先程と同じ光に覆われる。

やがて光が収まると、頭に骨の角を二本生やし、瞳が縦長の瞳孔に変化したシズルの姿が現れた。その袖の下から覗く肌からも、わずかに蒼い鱗が見え隠れしている。

その姿は、シズルの黒髪と身に着けている民族服にとてもよく似合っており、リースは思わず感嘆の息をついてしまった。

『綺麗だな……』

『うん』

リースが素直にトオルの言葉に同意する。

その間に、自身の体を眺めていたシズルが愉悦に顔を歪ませた。

「ふむう……素晴らしいなこれは」

シズルがそう呟いて、軽く右手を振ってみせる。

ただそれだけで、強い突風がリースを襲った。

リースが堪らず尻餅をつくくと、エルヴィとモクが抗議の声を上げる。

「シズル！ まだ勝負は始まってないですよ！ 卑怯です！」

「キュ！キュキュキュ！」

「すまんすまん、これ程とは思わなくのう」

あまり反省していなさそうな声色で謝りつつ、シズルはそのドラ

ゴンの瞳をリーズに向けた。

「さあ、リーズ。お主もさっさと融合するがよい」

シズルに促され、リーズは自身の使い魔であるケイタイデンワを見る。

リーズはその頭の中で、不安そうな声で俺の名前を呼んだ。

『トオル……』

『大丈夫だ。この時の為に寝る時間削って準備してきたんだろ？その成果を見せてやろうぜ』

『うん……』

リーズが頷くと、俺の携帯電話が眩い光を放ち、リーズの体へと吸い込まれていった。

続けてリーズの体が光に包まれ、視界が眩い光のみになる。

やがてその光が収まると、真っ先に呆けたような顔をしているシズルの顔が映った。

気がつくと、エルヴィヤカルディナも同じような顔をしている。それにリーズが首を傾げると、シズルが盛大な笑い声を上げた。

「ま、全く何も変わっておらぬではないか！これは傑作じゃ！

お主が召喚したのは本当に召喚獣だったのかえ？」

「リーズ……」

「キユウ……」

腹を抱えて笑うシズルに、流石にエルヴィとモクも不安そうな声を上げる。

だがリーズは、自分に起こった変化を理解していた。  
自身の目のみ見える映像が、リーズの思い描く通りに蠢く。  
その様を見て、俺は思わず感嘆の声を上げた。

『すげえ。まるで攻 機動隊みてえだ』

『ごうか…何？』

『とにかく、凄いつてことだよ。ファンタジーじゃなくてSFみてえだ。もしかして体のほうもサイボーグになってるんじゃないか？』  
『……よく分からない』

リーズが頭に疑問符を浮かべている間に、審判である白い球体の光が、試合開始が近いことをリーズ達に伝えてくる。

> 試合まで残り十秒。カウントを開始する<

そのカウントが始まると、笑い声を止めたシズルが、今度はリーズに同情的な言葉を投げ掛けてきた。

「運が悪かったのう、リーズ……お主の魔術に対する姿勢だけは、そこらの有象無象の生徒なんぞよりも好ましく思っておったのじゃが……」

シズルはそう言いつつ、いつでも動き出せるように構える。リーズのことを笑いつつも、シズルに油断は微塵もないようだ。

それに応じて、リーズもいつでも映像パネルがタッチできるよう、両手を構える。

審判が試合開始を告げる寸前、その妙な構えに首を傾げるシズルに、リーズは言葉を返した。

「わたしも……シズルこと……嫌いじゃない」

審判が試合の開始を告げる音を鳴らすと、リースは中空に映し出される映像パネルを素早くタッチした。

キュルキュルキュルと音が鳴るのと同時に、シズルが地面を蹴ってリースに接近しようとする。

人間が持つ走力を遥かに超越した速度での接近はしかし、先に発動したリースの魔法よってはじき返された。

小さく発生した稲妻と正面から衝突し、シズルの体が大きく後退する。

「っ！？　今のはライトニングかえ？　そんな馬鹿な！」

ライトニングとは、風属性に含まれる下位魔法である。当然、その程度の魔法ではドラゴンと融合したシズルの体にダメージはない。シズルが驚いたのは、その魔法が発動するのに、詠唱が全く聞き取れなかったことであった。

リースはシズルに向かって、そのライトニングをさらに連続で起動する。

それはリースが録音した呪文を、俺が限界まで高速にしたものだった。

ほぼ無詠唱に近い速度で連射されるライトニングに、シズルはダメージはなくとも、その場から全く動けなくなる。

『トオル、これ凄い』

『てつきりドラゴ　ボールのサイ　人みたいに、見えない速度で襲ってくるのかと思ってたけど、そうでもないのな』

リースはただ指を動かしているだけなので、俺と呑気に喋る余裕

さえあった。

だがこの状態が続けば、いずれリーズの魔力が尽きてしまうだろう。

下位魔法ではシズルにダメージを与えられないのだ。

だからリーズは、最初の段階で上位魔法を同時起動していた。

高速再生でも十数秒以上かかったその呪文が、下位魔法でシズルを縫い止めたまま発動する。

そのシズルの立つ位置から丁度上空に現れたそれに、シズルが目をむいた。

「ちよ  
」

シズルが何か声を上げきる前に、その巨大な隕石がシズルごと地面に衝突する。

リーズは防御魔法を多重発動させて、そのメテオという大魔法の衝撃波から身を守った。

「あつ  
」

そこで初めて、リーズは自分の失策に気がつき声を上げる。

メテオによる衝撃波が収まると、リーズは慌ててあたりを見回した。

美しい草原であったはずのその場所は、今は地面が捲れ上がり、見る影もなくなってしまうている。

そこに、エルヴィヤカルディナの姿もない。

気がつくのと、その世界に残っていたのはリーズ一人になっていた。

一定以上のダメージを受けたものは、強制的に外へと送還されてしまうのである。

リーズは周りを巻き込んでしまうことを失念していたのだ。

> 試合時間、十八秒。勝者はリーズ・アングティルとエルヴィ・パ  
ルムグレンのチームとする<

審判である光の球体が、棒読みでリーズの勝利を宣言した。



## 第九話

シズルとの試合が終わり、私が元の世界に繋がる狭間の扉をくぐると、荒れ果てた草原から薄暗い螺旋階段へと景色が塗変わった。私が石で出来た階段の上に立つと、真っ先にエルヴィが私に抱きついてくる。

「リーズ、凄いいじゃないですか！ 一体あれはどういった特性なのですか！？ 私、何が起こってるのか全然分かりませんでしたよ！」

エルヴィが歓喜の声を上げながら、私を抱えてゆらゆら揺らした。私とその揺れる視界で辺りを確認すると、エルヴィと一緒に強制送還されたはずのカルディナの姿がないことに気がつく。

「カルディナは？」

「賭けの結果報告をしに行きたみたいですよ？」

私にそう説明しながら、エルヴィは私の体を解放した。

「今頃、リーズのことを侮っていた連中は悲鳴を上げてるんじゃないですかね 秒殺で負けるどころか、秒殺で勝利ですよ！」

試合のことを思い返したのか、エルヴィが興奮した声を上げる。すると、それまで呆然と立ち尽くしていたシズルが、エルヴィの秒殺という言葉に反応して体を震わせた。

「嘘じゃ……わらわが、よりもよってこんな負け方を……」

あまりにもあっさり敗北した事がよほどショックだったのか、未

だに信じられないといった様子で、シズルがブツブツと独り言を呟く。

そのシズルの姿を見たトオルが、ふと疑問の声を上げた。

『ん？　そういうえば、なんでシズルは何ともないんだ？　リースの魔法を全部まともに喰らったように思ったんだが……つつか、服も傷一つないぞ？』

シズルはライトニングを雨のように浴びた時点で、身に着けている衣服もボロボロになっていた。

だが、元の世界に戻ってきたシズルの服には焦げ跡一つ残っていない。

それはメテオの余波を受けたはずのエルヴィも同様である。

私はそのことについて、起こった事をトオルに説明した。

『この世界に戻ると、あちらの世界で変化したもののうち記憶以外が、扉をくぐる前の状態に戻るようになってる』

『へえ。それも魔法なのか？』

『違う。そうなるのは、世界を渡る時の副次効果らしい』

『どういうことだ？』

『……実は詳しいことは、こちらの世界でも分かっていない。ただ便利だから、学院で使われている。あちらの世界で戦うようにすれば、危なくなつた時に強制送還するだけでいいから』

『なるほどな』

私とトオルがそんな話しているうちに、ようやくシズルが少し落ち着いたらしい。

その顔に神妙な表情を浮かべて、シズルは私の前に立った。

「　　っ」

シズルは私に何かを言いかけて、言葉を詰まらせてしまう。慌てて何かを堪えるように瞼を閉じるが、溢れ出すそれを塞ぎ止められずに、シズルの頬を伝った。

シズルはそれを見られたくなかったのか、右手に持つ扇子を広げて、私の視線から顔を隠す。

「すまぬ、はじめは後で付ける。今は」  
「……うん」

その擦れる声に、私は頷くしかなかった。私の余計な慰めは、彼女のプライドをさらに傷付けるだけだろう。だから今は、先に帰っていくシズルの背中を、黙って見送ることにする。

そのシズルの背中が見えなくなったところで、しんみりしてしまった場の雰囲気吹き飛ばすように、エルヴィが明るい声を上げた。

「これで、改めて私達はチームが組めるわけですね」  
「うん」

「リースの初勝利祝いです！ 今日はいっつとやっちゃいましょう  
リースは何かリクエストはありますか？」

エルヴィが満面の笑顔を私に向けたところで、私はようやく自分の勝利を実感する。

それと同時に、抗えない脱力感が私を襲った。

「じゃあエルヴィ」

「はい」

「私を寮まで……運んで」

「えっ」

私は残った気力でそう言つと、倒れ込むようにしてエルヴィに体を預ける。

シズルと勝負をすることが決まったのが三日前。

私はその日から今日まで、全く寝ていないなかった。

『お疲れ様』

『……』

トオルの声に心地よいものを感じながら、私は意識を沈ませる。今回は長い時間、トオルの世界が見られそうであった。

この日、リーズ・アンクティルという少女は、その名を警戒と畏怖の対象として、同級生らに刻みつけることになった。

## 第十話

リーズがあちらの世界で眠りに就くと、やはりリーズの意識は俺の世界にへとやってくるらしい。

休日の朝。俺は目を覚ました時に、頭に響いてきた声によってそれを再確認した。

『トオル、おはよう』

『……おはよう』

起き抜けに可愛い女の子から声を掛けられる。

よく考えれば、これはとても美味しいシチュエーションではないだろうか？

だというのに、何かが釈然としない。

俺は首を傾げながらベットから這い出ると、すぐにその原因に思い至った。

たしかに美味しいシチュエーションではあるのだが、そこに肝心の実体がないのである。

俺が今しているであろう、だらしない表情を見られることがないのは良いが、その代わりに俺もリーズの姿を見られないというのは残念でならない。

大事なものは外見より心とさえは綺麗だが、やはり外見があるのも大事だと俺は思った。

俺が住んでいる場所は、少々狭めの土地に二階建ての瓦屋根という、日本では何処にでもあるような普通の一軒家である。

その内装も、多少ごちゃごちゃ散らかっていること以外は、何の変哲もないもののはずだった。

だがそれは、この世界に慣れた俺の認識ではない。

此処とは違う異世界に住むリーズにとっては、それらが違って見えたらしい。

俺が身だしなみを整えたり、朝食を摂ったりしている間に、リーズは逐一質問を浴びせ掛けてきた。

『トオル、あの箱は何？ 中で人が喋っているように見える』

『あれはテレビだよ』

『テレビって何？ 魔法？』

『ええっと……なんて説明すればいいの……』

『トオルが今食べているものは何？ 天井にある円盤のようなものは？ 食料が詰まっていた白い箱がもう一度見たい』

『……』

俺が答えに窮しても、リーズはお構いなしに質問を続ける。

とにかく此処にあるもの全てが、リーズには珍しく見えるらしかった。

そういえば、シズルとの勝負が決まってからリーズはずっと徹夜続きだったので、リーズの意識がこちらの世界に来るのは、まだ二度目である。

今日はせつかくの休日でもあるので、俺はこっちの世界の色々な場所を案内しようとリーズに提案したが、それよりもリーズは俺の通う学校が見たいと言い出した。

『面白いもんは、あんまりないぞ？』  
『多分、そうでもない』

俺はリーズの強い要望に応え、制服に着替えて自分の高校へと赴くことにする。

その道中でも、リーズの質問の嵐は続いた。

俺はそんな矢継ぎ早の質問の応じているうちに、なんとなく一つの傾向に気がつく。

リーズはこっちの世界にあるものの中でも、特に機械類に強い興味を示しているようだった。

道路を走る車や、その端にある自販機など、そういったものがある度に詳しく説明を求められる。

特に電車に乗った時は、小さく歓声を上げたほどだった。

リーズにしては珍しいそのはしゃぎようが、何故か俺には嬉しく感じられて、答えられる質問には全て応じてやるようにする。

そのせいで結局、目的地である学校に辿り着いたのは夕方になってからだった。

途中で電車を乗り回して寄り道しまくったせいで、こんな時間になっちゃったのである。

それでもリーズは、まだ満足していないらしい。

むしろ最初の頃よりもテンションを上げつつ、俺がいつも多くの時間を過ごしている場所を、優先して見回るように要求してきた。

そうして、夕焼けに染まる校舎内を、女の子と一緒に歩く。

そうと書くと、非常に甘酸っぱい青春のような感じがするかもしれない。

だが生憎と、傍目から見れば俺は一人である。



しかも休日の学校に、部活などもないのに徘徊する不審な生徒である。

俺はなんとなくビクビクしながら、自分がこの学校で二番目に過ぎた時間が長い場所へと、リーズを案内した。

授業の合間の休み時間に、俺が居座っている場所である学校の屋上。

その場所から、黄金色に染められた街並みを見て、リーズは本日二度目の歓声を上げた。

弾んだ声で、屋上から見える様々な場所について俺に解説を求めらる。

俺にとって学校の屋上とは、友達作りに失敗したが故に、居場所がなくて逃げ込む場所であった。

そのせいか、やたらとはしゃぐリーズとは裏腹に、俺は少し冷めた気分になってしまう。

『楽しそうだな』

『うん』

『……………』

俺はそこで、ふと以前にリーズが言っていた言葉を思い出した。

トオルの目には、この世界がどう映っている？

もしかすると、あの時のリーズは、今の俺と同じ気分だったのだろうか？

そう思うとつい、俺は口から余計な言葉を漏らしてしまった。

『お前さ、もしかして自分の学校嫌いか？』  
『……………』

その唐突な質問に、リーズは沈黙する。  
俺はなんとなく、その沈黙は肯定を示しているような気がした。  
リーズのその反応が意外で、俺は首を傾げる。

『俺から見れば、すっげえ楽しそうな場所に見えるんだがな』  
『……………楽しくなんかない』

ポツリと漏らされる、リーズの言葉。  
まるで泣いているかのような声色によって、それが紛れもない本音だということを、俺は理解した。

『私にとってあの学院は……………苦しいだけ』  
『……………俺が知らないだけで、あの学校に何か後ろ暗いことがあるとか？』

『そついうわけじゃない』  
『じゃあどうして？』  
『……………』

リーズは沈黙して、俺の疑問には答えない。  
俺も、そこに何か重たい事情があるのを察して、それ以上踏み出せなくなる。

だから代わりの言葉を、俺は選んだ。

『リーズの目には、今のこの世界がどう見えている？』  
『え？』

リーズが戸惑うのを無視して、俺は夕日を視界に収めてリーズの返答を待った。

しばらくして、リーズは困惑しながらも俺の問いに応じる。

『とても綺麗。トオルの世界の夕日は、私のいる世界のものよりも赤い輝きが強い。少し羨ましい』

『あれはな、実は俺の世界の空気が汚れに汚れているせいなんだぜ？ 汚染されてんだ。俺の世界は』

『え……』

言葉を失うリーズに、俺は苦笑して言葉を続けた。

『それ以前に、俺は此処からの景色が嫌いだ。この景色を眺めてるような時は、陰鬱な気分が多かったからな』

『……』

『見ている人間が違うだけで、こんなにも感じる事が違う。でも本来は何も知らないお前が感じたことが本当で、俺がこの景色が嫌いなのは、俺の先入観のせいなんだろうよ』

『……』

リーズは沈黙を保って、俺の言葉に反応を示さない。

だが俺の声は、リーズに届いているはずだった。

『お前は強くなったんだ。落ち零れの時とは違って、これから少しは余裕もできるだろ。だから、一度周りをよく見てみるといい。お前の学校生活は、苦しいだけじゃないはずだぞ？ だってお前には』

『

その言葉の途中で、俺の中からリーズの意識が離れるのを感じる。恐らくは、あっちの世界で目が覚めてしまったのだろう。

「タイミング悪すぎだろ……」

せつかく無理してクサイ台詞を吐いていたというのに、これはない。

俺はその運命の空気の読めなさに、その場で頂垂れた。

トオルが何かを言いかけたところで、リーズは目が覚めた。

自分の住んでいる寮の、いつもの見慣れた天井が視界に入る。

時間的には深夜だが、窓から射し込む月の光によって、室内は比較的明るい。

リーズがなんとなくブーツと天井を眺めていると、ふと自身の傍らに人影があることに気がついた。

それに顔を向けると、自分の寝ているベットの傍らで、両腕を枕にして寝ているエルヴィが視界に入る。

「リーズう……無理させて……ごめんなさい」

そんな寝言を漏らすエルヴィの姿を見て、リーズは目を細めた。そして、先程トオルに漏らしてしまった言葉を、リーズは後悔する。

「私こそ……ごめん」

その言葉は誰に届くわけでもなく、ただ夜闇の中へと霧散した。

## 第十一話

ランク戦とは、両者の合意と申請がない限り、その対戦相手は同ランクの中からランダムで決定される。

それは、ランク戦に参加したばかりの一年生達も例外ではない。故に、未だGランクから昇格できずにいる上級生にとっては、この時期は格好のチャンスであった。

まだランク戦に不慣れな一年生が多く参加するので、それよりは幾分か戦い馴れている上級生が、勝ち星を増やしやすいためである。

そのような事情があつて、この時期に上級生と一年生の試合が組まれると、上級生側は自身の幸運にほくそ笑み、一年生側は自身の不運を嘆くのが通例であつた。

だから、赤い荒野のフィールドで私と対戦することになった上級生も、試合前はその通例に則つてほくそ笑んでいたのだが……

「ちよつ、待」

「こんなの聞いてないぞ！」

その上級生である二人組の男は、今はそれぞれの喚き声を上げながら、自身の不運を嘆いていた。

連続再生の多重起動によって、雨のように降り注ぐライトニングに、男達が荒野を這いずるようにして逃げ回る。

シズルと違い、様子を見ようと開始直後に距離を取ったのが幸いしたのか、上級生の男らは辛うじて魔法の連撃から逃れることに成功していた。

だがそれも長くは持たず、上級生の片割れがライティングをその身に受けてしまう。

その一瞬の硬直を逃さず、私はライティングの連射を、その片割れの男に集中させた。

その姿が掻き消えるほどの数のライティングが、全てその男に命中する。

「チャーリーイイイイイイイイイイ」

逃げながら相方の名前を叫ぶ上級生の声に合わせて、ライティングの集中砲火を受けた男が、この世界から消えた。

「てめええええええええ、よくもチャーリーをつ！」

相方のことを想い、上級生の男が怒りの声を上げる……逃げながら。

「絶対に負けてやらないからな！ やれるものならやってみやがれ！」

男が私に向けて、勇ましく中指を立ててるジェスチャーをする……逃げながら。

融合した使い魔の特性なのか、その男の速力だけはドラゴン並であつた。

『蝶のように、じゃなくてゴキブリのような逃げっぷりだな』

『その例えは可哀想……』

血相を変えて走り回る男に、少し憐れみを覚えなくてもない。

でも結局私は、裏で再生させていた大魔法を容赦なく放った。

それによって唐突に空が暗闇に包まれ、そこから多大な力を内包した球体が、逃げ回る男の近くへと舞い降りる。

「……………へ？」

青く発光する球体が宙に静止するのを見届けて、男が間抜けな声を上げた。

その次の瞬間、青い球体が轟音を伴いながら弾け、広範囲に渡って紫電の渦を巻き起こす。

周囲一体を全て覆い尽くすかのような攻撃に、男は為す術もなく巻き込まれた。

風属性の大魔法の一つである、サンダーストーム。

その余波を、私はシールドと呼ばれる防御魔法を多重起動させて防ぐ。

今回はエルヴィも私の傍にいて、その防御魔法の内側にいた。

やがてサンダーストームの攻撃が終わり、空の色が元に戻ると、男が強制送還によって姿を消す。

続けて審判の棒読みの声が、私達の勝利を宣言した。

> 試合時間、二十六秒。勝者はリーズ・アングテイルとエルヴィ・パルムグレンのチームとする<

そのあっさりと終わってしまった試合に、私の隣にいたエルヴィが困ったような笑顔を浮かべる。



何故エルヴィが、そのような表情を見せるのかが分からず、私は首を傾げた。

「私の出番が、欠片もなかったですよリーズ……」  
「……あ」

私が自分の失策に気がつく、エルヴィはますます苦笑を深くする。

私にとって二回目の試合である今回は、エルヴィもモクと融合することで試合に参加していたのだが、その力を試す間もなく、私が終わらせてしまったのだ。

試合が終われば、私達は早々にこの世界から出なければいけない。エルヴィは名残惜しそうに、自身の融合した姿を眺めた。

モクの長い耳と酷似したものを頭に生やし、体の節々をやらかそうな灰色の毛皮に包んだその姿は、その褐色の肌と奇抜な服装によく似合っていて、とても可愛いと思う。

トオルなどは、その姿を見たときに「モエー」とかいう奇声を上げていたほど気に入っているようだった

「まあ、力を試すのは次の機会にしましょう……」

「ごめん」

「リーズが謝る必要ありませんよ！ それよりも、勝ったんですから喜びましょう」

「……うん」

私とエルヴィが狭間の扉をくぐると、元の世界の螺旋階段に戻ってくる。

すると、丁度試合を終えて階段を上っていたシズルと、鉢合わせ

することになった。

「あっ」

期せずして、お互いの声が重なる。

シズルは今日の通常授業を休んでいたの、昨日の決闘以来、ずっと私と顔を合わせていなかった。

そのシズルが気まずそうに顔を伏せると、その後ろからカルディナが顔を出す。

「あ、エルヴィとリーズも試合終わったの？」

「うん」

「どうだった？」

「勝った」

「おめでとう。私達も勝ったんだよ」

カルディナが嬉しそうに声を弾ませると、私の隣にいたエルヴィが、カルディナとシズルの顔を交互に見て首を傾げた。

「もしかして、シズルとカルディナは正式に組んだのですか？」

「そうだよ？ 私の使い魔の能力と、シズルのドラゴンは相性が良いことが分かってね」

「むむむ……少し意外です」

「そう？」

私達がそんな会話をしていると、それまで俯いて沈黙していたシズルが、意を決したように顔を上げた。

表情を引き締めて、シズルは私と目を合わせる。

その張り詰めた空気を察して、カルディナとエルヴィが気を遣っ

て口を閉じた。

「遅くなってすまぬリーズ。わらわは、これまでの非礼をお主に詫びよう。……勝負は、お主の勝ちじゃ」

「うん」

プライドが高く、さらには自分の努力に誇りを自信を持っているシズルだからこそ、その言葉には重みがあった。

恐らく、自分の敗北を受け入れるまで、かなり苦悩したのだろう。今日の授業を休んだのも、そのせいかもしれない。

それでも、最後には全てを呑み下してみせるのがシズルという少女だった。

「……だが、次は負けぬぞ？ 自分の力をもつと磨き、完璧に使いこなした上で、再びお主らと相まみえよう。それまで首を洗って待っておれ」

「うん。私も……負けない」

不敵な笑みを浮かべるシズルに、私は強い視線で応じてみせる。

そのシズルらしい締めくくり方に、エルヴィとカルディナが、シズルに見えないよう苦笑しているのが分かった。

緊張感があるようで、どこか暖かく弛んでいる雰囲気、私も思わず笑ってしまいそうになる。

だが、その心地良い空気は、螺旋階段の下のほうから歩いてきた凄まじい存在感を持つ二人組によって、吹き飛ばされることとなった。

一人は、長い白髪に赤い瞳をした長身の少年。  
もう一人は、亜麻色の髪を長く伸ばした、私よりもさらに小柄な少女。

その少年も少女も、全身を黒に統一した衣服に身を包んでおり、その全身に施された銀の装飾品のせいで、二人が歩く度にジャラジャラと音が鳴っていた。

別に二人は歩いているだけで、特に何かをした訳ではない。

全身の至る所に穴を通して、銀の装飾品を身に着けている少年の外見も、視界に入らなければ、誰も怯むことはないだろう。

目の下に濃いクマを作り、自身の使い魔を抱え込むようにして猫背になっている少女も、外面は見るからに陰鬱そうな空気を放っているが、見なければ気にならないはずである。

だが、その二人が近くを通過するだけで、私達の視線はその二人に釘付けとなってしまうた。

それは私達だけではなく、塔にいたGランクの全生徒が、同じようにその二人に視線を注いで硬直している。

その二人が歩くだけで、塔内に奇妙な静寂が漂っていた。

やがてカルディナがその二人組の姿を見送ってから、微かに震えを含んだ声を上げる。

「カイク・ヴェルレーとリリス・ヴェルレーだね」

「有名人なんですか？」

険しい表情をして冷や汗を拭うエルヴィの質問に、カルディナが深く頷いた。

「兄妹で組んでるBランクの人だよ。かなり強くて、Aランクになるのは時間の問題だって言われてる」

「なんでそんな人がここにいらっしゃるんです？ 今日Gランクの試合の日でしたよね？」

「何やら違犯をして、BランクからGランクに落とされたと聞いたの。……じゃが、それにしても」

シズルが何かを言いかけて、言葉を呑む。

その表情が悔しそうに歪むのを見て、なんとなくシズルが何を言いかけたのか理解した。

圧倒的強者。

本来、このランクにいるはずがない者。

あの二人の姿を傍で見ただけで、Gランクの生徒達は、その絶望的な力の差を思い知らされた。

それはシズル達も例外ではなく、未だ自分達が未熟な一年生であるのを自覚させられる。

だが私はそれとは別に、どこか妙な違和感を、さっきの二人から感じていた。

それを目撃く感じ取ったのか、トオルが私に声を掛けてくる。

『どうかしたか？』

『うっん……多分、気のせい……だと思っ』

『なんだそりゃ』

『……………』

気になることはあるが、関わるべきではないかもしれない。  
私はそう思い、とりあえず二人のことは忘れることにした。

だがリーズは、後に意外なところであの二人と相まみえることになる。

## 第十二話

リーズとエルヴィの二勝目と、シズルとカルディナの初勝利。お互いに勝利という形で終えた今日のランク戦の後、リーズ達は一旦、カルディナの住む女子寮の部屋へと赴くことになった。カルディナ曰く、昨日の試合で行っていた賭けの配当が、よつやく纏まったらしい。

結局、あの賭けはエルヴィの一人勝ちという結果になってしまい、その配当金が相当なものになってしまったので、女子寮にまで取りに来て欲しいとのことだった。

リーズ達が狭間の塔を出てから、その話をカルディナから聞かされると、横からそれを聞いてたシズルが、目を丸くして首を傾げる。

「賭けとは何の話じゃ？」

そんなシズルの疑問に、リーズ達は思わず顔を見合わせた。

リーズ達の反応に戸惑っているシズルの様子からして、本気で彼女は賭けのことを知らなかったらしい。

あれだけ生徒の間で話題になっていた事柄を、シズルが今まで知らなかった原因に、リーズ達は知らず同じ結論に思い至った。

「ほら、シズルは目立つけど友達がいらないから……」

カルディナが声を潜めてそう言うと、シズルが手に持っていた扇子でリーズ達を指しながら、憤慨の声を上げる。

「聞こえておるぞ！ 失礼な！ 友達ぐらいおるわ！」

「例えば誰です？」

何気なくエルヴィがそう聞いてしまうと、シズルは言葉を詰まらせて思案した後、視線を明後日の方向へと向けた。

「それは……えつと……」

シズルは頬に伝う冷や汗を、それは気温のせいだと言わんばかりに、扇子でパタパタと煽る。

やがて自分の隠された事実気がついたシズルが、顔を青くして消え入りそうな声で呟いた。

「お、お主らは……友達ではないのかえ……？」

そんな上目遣いのシズルの言葉に、エルヴィとカルディナは生暖かい笑顔を浮かべて顔を見合わせる。

「なんだか、私の中のシズルの印象が変わりましたよ……」  
「私も」

その一連の流れを、身につまされる思いで見ていた俺は、思わずシズルに同情の声を上げていた。

『ぼっちは辛い……、マジ辛いぞ。どれくらい辛いかというと、思わず昼飯をトイレで摂ってしまいそうになるくらい辛い』

『……トイレでっ…』  
『実際にやったことはねーけどな』  
『……』

俺のその余計な言葉に、どうやらリーズが危機感を募らせたらしい。



リーズは真剣な表情をして、シズルの正面に立った。

「シズル」

「なんじゃ？」

「トイレでご飯は……食べちゃ駄目」

「そんなことせんわ！」

堪らずリーズにそう叫ぶと、シズルは怒りの形相を浮かべたまま、先にカルディナの住む女子寮の方角へと歩き始める。

カルディナとエルヴィは、その背中に苦笑しながら後に続いた。

その歩き出した方角が、リーズの帰る寮とは違う方向だということに、俺は気がつく。

『リーズが住んでる女子寮とは違う場所なんだな』

『うん。女子寮は基本的に、出身国がある地域によって違う』

『へえ〜。地域によって分けてんのか』

『各女子寮は、それぞれの故郷の生活様式に、できるだけ合わせるよう配慮が成されている。特にシズルのいる女子寮などは、外装からして違うものになっている』

『なるほどな』

リーズの歩きながらの解説を俺が理解すると、今度はそのリーズの視界の端に映ったものが気になった。

『あの右の方にある塔は何だ？ 何だか狭間の塔に似ている気がするけど……』

俺の言葉を受けて、リーズはその塔に顔を向ける。

リーズ達がランク戦を行った狭間の塔よりも、さらに外観に古め

かしさを加えた上で、その中央をぶち抜くように老木が生えている塔だ。

その老木が、俺にはまるで苦悶に喘ぐ人間のようにも見えた。そのせいで、ただでさえ不気味な塔の外観を、さらにおぞましいものにへと演出してしまっている。

その塔を眺めていたリーズが、何故かゴクリと唾を飲み込んだ。そんなリーズの様子に気がついたカルディナが、そのリーズの視線の先にある塔の名前を呟く。

「冥界の塔……だね。リーズはあれに興味があるの？」

「そういうわけじゃない」

「んん？」

首を横に振るリーズの様子に、カルディナが首を傾げる。それを見たエルヴィが、苦笑を浮かべながら声を上げた。

「あの塔には、数多くの曰くがありますからね……。リーズは、靈魂の類のものが苦手なのですよ」

「へえ〜、ちよつと意外だね」

カルディナが何気なくそう言うと、リーズが気丈な声でそれを否定する。

「違う……別に怖くはない」

その会話を聞いていたのか、先頭を歩いて背中を見せていたシズルが、唐突にリーズ達を振り返った。

その顔に挑発的な笑みを浮かべて、シズルがリーズの双眸を見据

える。

「なら、わらわ達の勝利祝いじゃ。今夜あたり、少しやってみるかえ？」

「何を？」

「冥界の塔の探索じゃよ。……肝試しとも言つもの」

「あ、それ面白そうだね」

そのシズルの言葉に、リーズが内心で激しく動揺したのを、俺は感じ取った。

『やっぱりお前、お化け怖いんじゃないか』

『怖くない』

リーズは意地なつてそれを否定する。

それに何かを察したエルヴィが、リーズの顔を心配そうに覗き込んだ。

「リーズ、無理することはないですよ？」

そんなエルヴィの気遣いの言葉がトドメになり、リーズはもう完全に意固地になってしまふ。

そして実は心にもないことを、リーズは口走っていた。

「無理はしてない……面白そう」

「私もちよつと気になってたんだよね」

「たしかに楽しそうですけど……むむ」

そんな三人の反応に、シズルは満足そうに頷く。

「ふむ。なら、決まりじゃの？」  
「……」

シズルが、ニヤニヤとした笑みを浮かべながら、リーズに確認した。

リーズは内心で怯みながらも、それに気丈に頷いて見せる。

そんなリーズの強がりにより、今日は冥界の塔で肝試しをするこ  
とが決定してしまった。

どうやら今夜は、リーズにとって長い夜になりそうである。

## 第十三話

それは、夜の闇が薄い満月の日に行われることになった。

俺の世界でいうと、今の時刻は学校が終わって自宅に帰宅したぐ  
らいの時間だが、リーズの世界では完全に真夜中である。

普通の生徒ならば、とっくに次の日に向けて睡眠をとっているよ  
うな時間帯。

そのような時刻に、リーズとエルヴィ、そしてシズルとカルディ  
ナの四人で、冥界の塔と呼ばれる建築物の扉の前へと立った。

その夜の闇を纏った外観は、日中の空の下で見るよりも遙かに禍  
々しい印象を受けてしまう。

塔の天井を突きや破って生えている老木の姿も、今では本当に人  
間の苦悶の音が聞こえてきそうなほど、おぞましい様相になってい  
た。

その見るからに何かが出てきそうなその塔の外観を眺めて、リー  
ズとシズルは揃って口の中の唾を飲み込む。

リーズだけではなく、今回のことを言い出したシズルまで顔面を  
蒼白にさせているのを見て、エルヴィが呆れた声を上げた。

「自分も怖いなら、何で肝試しをしようなんて言い出したんです？」

「わ、わらわは怖くないぞ！ 怖がつてるのは、リーズではないか  
え？」

「私も……怖くない」

意地を張り合うリーズとシズルに、エルヴィは苦笑してしまう。

そんな内心では怯えに怯えているリーズ達とは裏腹に、カルディナは冥界の塔に興味津々といった様子で目を輝かせていた。

「カルディナは楽しそうですね？」

「冥界の塔は生徒達の間でよく噂になっているから、前々から興味があつたんだよ」

「噂とは初耳ですね……どのような噂なのですか？」

「この塔にはね、文字通り、冥界に繋がった狭間の扉が残っているらしいよ」

カルディナ曰く、冥界の塔という名前は、この塔の本来の正式名称ではないらしい。

ただ、とある事情により廃棄されることになったこの塔に、忍び込んだ生徒達が何度も怪奇現象と遭遇していることによって、そういう名前が付いてしまったのだとか。

「少なくとも、何かがあるのは確実らしいよ？ この塔は立ち入り禁止にはなっているけど、忍び込む生徒は多いんだって。その生徒ほとんどが、何かしらの怪奇現象に襲われてるの」

「そ、そうなのですか……」

カルディナの話聞いて、流石にエルヴィも少し怖くなったのか、連れてきたモクを縋るように抱きしめる。

不覚にも、しっかりとその話を聞いてしまったリーズとシズルは、もう喋る余裕さえないほどになっていた。

そんな三人に構わず、カルディナは実に楽しそうに声を弾ませながら、冥界の塔の扉に手を掛ける。

「じゃあ行くよ？ 心の準備はいい？」  
「……」

誰も返事をしなかったことを気にした様子もなく、カルディナが半分壊れてしまっている鉄扉を押す。

すると、ギギギギギといった不気味な音を響かせて扉が開き、塔内の闇に月明かりを射し込ませた。

だが、それだけで塔内の闇を払えるはずがなく、カルディナが予め持ってきていた松明に火を灯す。それによって、狭間の塔のものと酷似した螺旋階段がずっと下に続いている様子が照らし出された。

「そういえば、灯りには松明使うんだな……魔法でパーッと照らしたりはできないのか？」

「そういう魔法も、ないこともない。でもそれには、誰かが常に声を出して詠唱している必要がある。そういうのは、魔力の消費も大きい」

「あゝ、確かにそれはめんどくさいな」  
「うん」

リーズが俺の疑問に答えながら、冥界の塔の内部へと足を踏み入れる。

余裕のあるカルディナを先頭にして、エルヴィが後ろに続き、最後尾にリーズとシズルが横に並ぶという配置で中に入り、塔内の螺旋階段を降りて行った。

皆が口を閉ざしたまま、黙々と階段を降り続けるという状況に耐えられなくなったのか、リーズは俺に追い詰められた声で懇願してくる。

『トオル、お願い。何でもいいから喋って欲しい。静かになると怖い……』

『やっぱり怖いのか……えーっと、どんな話がいいよ?』

『声かしているだけでいい。だから歌って』

『歌!? いや、まーいいけどよ……いや、恥ずかしいなこれ……』

『はやく、トオル』

急かすリーズの声に応じて、俺は自分の好きなアニソンを選んで、歌うことにした。

『きたいの〜うらにはあ〜よそうどおりのまぶしさ〜』

『……トオル、音痴』

『……………』

ボソッと呟かれたリーズの感想に、俺がショックを受けて黙り込む。

それと同時に、それまで辺りの闇を払っていた松明の炎が、ふと唐突に消えてしまった。

視界が一寸先をも見渡せない暗闇に包まれると、続けてリーズは何者かに押し倒されてしまう。

その突然の出来事に、リーズはパニックを起こしてしまった。

『トオル! 歌って! 歌って!』

『つたえにきたよ〜きずあとたどって〜 せかい〜』

『トオル! 音痴!』

『うるせえ!』

『トオル、どうしよう!』

『俺の携帯に照明になるものが付いてる。だから落ち着け』



リーズは俺の指示に従って、まずはギャラクシー起動させる。その画面から放たれる光だけで、とりあえずリーズを押し倒した者の正体は判明した。

自分の体にしがみつき、目を固く閉じて体をカタカタと震わせているそれに、リーズは安堵の息をついて、その名を呼ぶ。

「シズル……」

リーズが携帯の照明を点灯させ、近くを見渡せる程度には辺りが明るくなった所で、やっとシズルが落ち着きを取り戻した。

シズルは我に返ると、自分の失態を誤魔化すように一つ咳払いをしてから、リーズを解放して立ち上がる。

その耳まで赤くなった自分の顔を隠すようにして、シズルは扇子を広げた。

「す、少し転んでしまったの……」

「シズル……その言い訳は……苦しいと思う」

「っ」

やはり自覚があるのか、シズルは声を詰まらせてますます赤くなる。と、そこでシズルはあることに気がつき、首を傾げた。

「そういえば、カルディナとエルヴィはどうしたのじゃ？」

「っえ」

リーズはパニックによって失念していた二人の姿を探して、辺り

を見渡す。

だがその二人の姿は、どこにも見当たらなかった。

その事実には、リースとシズルは顔を見合わせる。

リースもシズルも一瞬、互いに怯んだ表情を見せるが、すぐに二人とも表情を引き締めてみせた。

その二人の瞳に、怯えを掻き消す強い意志の光が灯される。

「二人を見つけるまでは帰れんの」

「うん」

「何が相手かは知らぬが、わらわのパートナーを拐かした罪は重たいぞえ？」

「そう」

塔に入った頃の怯えようとは打って変わって、不敵な笑みを浮かべるシズルに、リースは心から同意した。

「お前ら、やっぱり似てるな……」

「そう？ 自分では分からない」

リースは俺の声に感じながら、消えた二人を探すべく歩みを再開させる。

とりあえずリースとシズルは、塔の最下層を目指すことにした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3904y/>

---

使い魔はGALAXY

2011年11月20日18時48分発行